

# 萩市郷土博物館研究報告

第 9 号

萩市郷土博物館  
1998



# 萩市郷土博物館研究報告

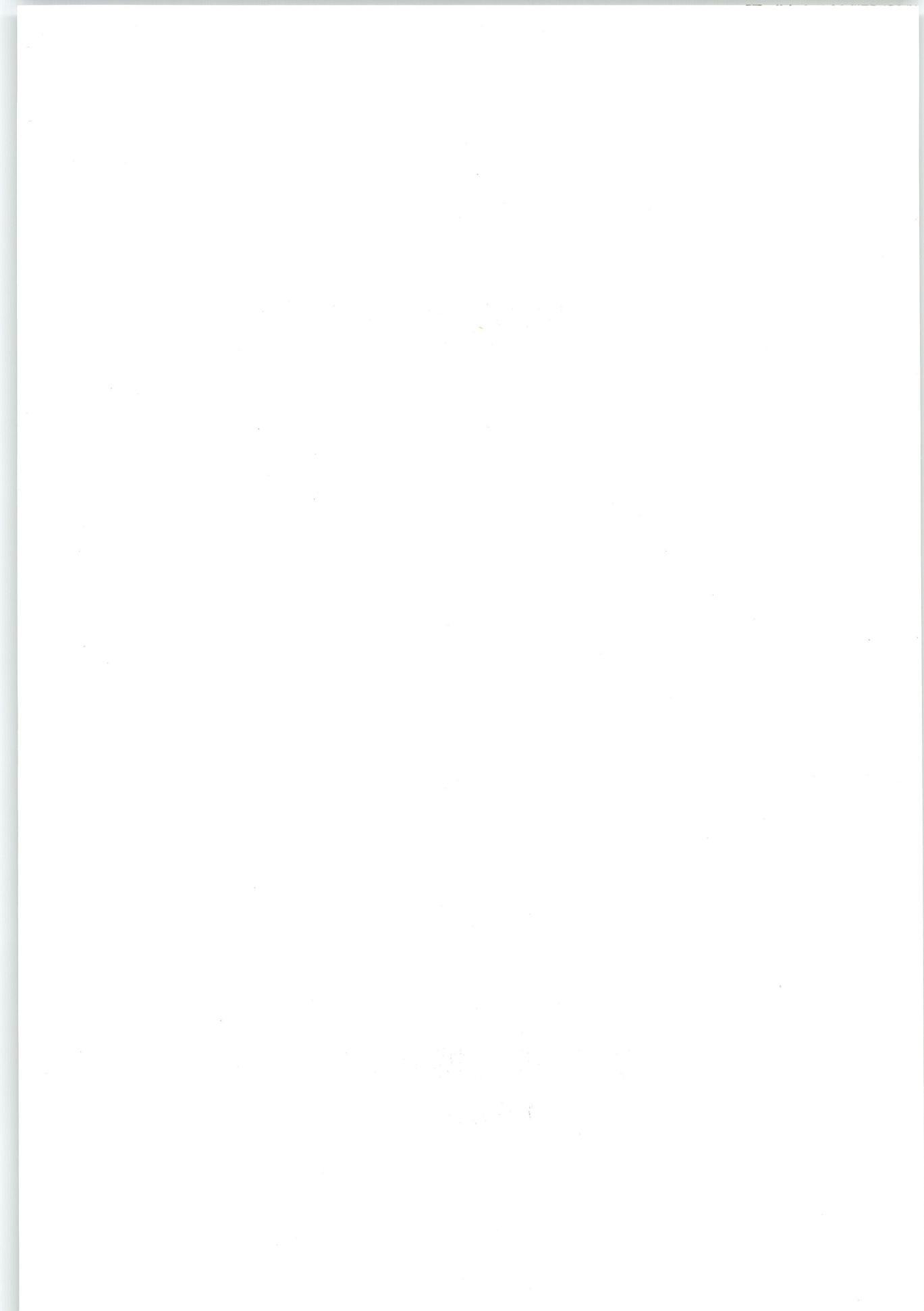
第 9 号

萩市郷土博物館

1998

4887

萩市郷土博物館



# 目 次

茨市指定文化財「史跡茨城下街割原標石」再考

..... 樋口 尚樹 ..... 1

金谷天満宮造替に伴う礫石経について

..... 柏本 秋生 ..... 7

ふかはえなわ  
鰯延縄漁と茨地方漁船の朝鮮半島近海への出漁

..... 清水 満幸 ..... 15

〈史料紹介〉

杉家旧蔵久坂玄瑞書簡・高杉晋作書簡

..... 樋口 尚樹 ..... 19

茨市大島の木本性植物

..... 本田 耕吉 ..... 23

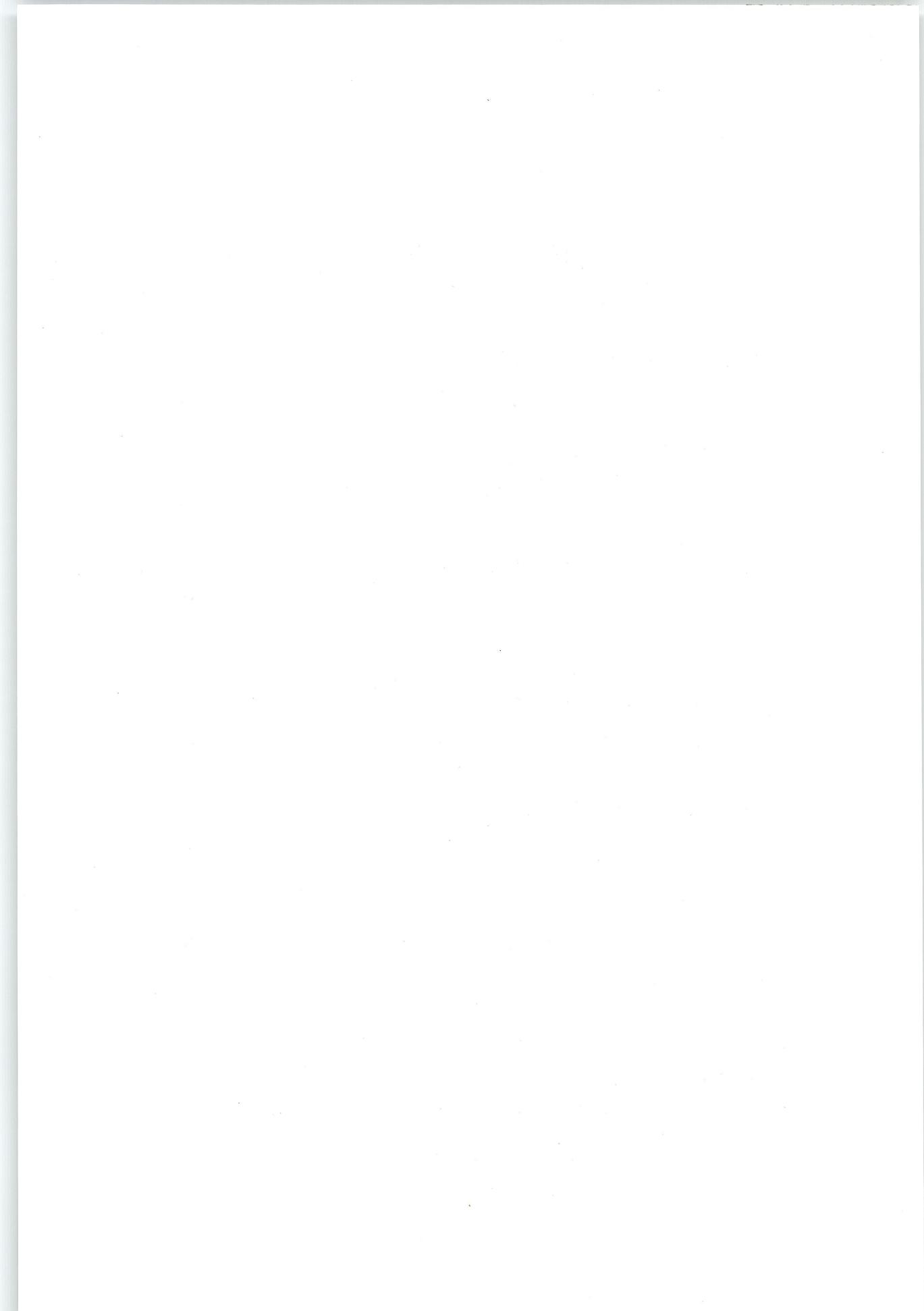
櫃島・尾島（茨市沖合）の非海産貝類

..... 増野 和幸 ..... 32

〈巻末付図〉

茨関係明治維新人物生没年一覧

..... 近藤 隆彦



# 萩市指定文化財「史跡萩城下街割原標石」再考

\*樋口尚樹

## 1. はじめに

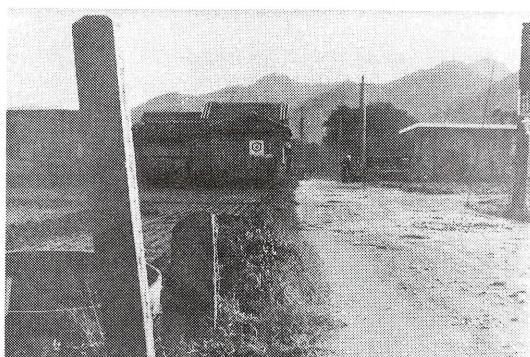
「史跡萩城下街割原標石」は、萩市民館の北西隅に位置している。もともと現在地の北西約7.5メートルの江向米屋町下り筋に所在していたが、昭和42年（1967）米屋町下り筋の道路拡張のため、10メートルほど南東に移され、さらに平成5年（1993）萩市民館西側の楽屋建設のため、現在地に移設された。元の位置には、路面に花崗岩を埋め標示している。

「萩城下街割原標石」は、昭和37年（1962）1月11日、史跡として萩市の文化財に指定された。その時の指定台帳に次のようにある。

慶長九年萩城構築にともない、同十年城下における諸土の宅を定められ、ついで同十三年（一六〇八）に市街建設に際し「萩の正中は米屋町より江向縄手に出てて東側第一の宅地（世に之を大西屋敷という）の西北角なり」として、藩士長富佐兵衛が命を受けてここに石を立て表して測量の起点にした。この事は鳥田智庵記に基く安藤紀一集録の「萩史料」に出ている。眇たる小自然石が三十五（三百五十…筆者註）年間路傍で保存された事は奇跡に近く、しかもこれは城下町萩建設の礎石の一であるから史跡としての価値は大きい。



文化財指定当時の「萩城下街割原標石」



文化財指定当時の「萩城下街割原標石」

指定台帳では、安藤紀一著『萩史料』<sup>(1)</sup>に集録されている「鳥田智庵記」<sup>(2)</sup>を典拠として、「萩城下街割原標石」は慶長13年（1608）城下町建設に際して、測量の起点にされたと断定している。

現在、「萩城下街割原標石」の傍らに立てられている説明板には次のように記されている。

江戸時代中期の「鳥田智庵記」に、「萩の正中石は米屋町より江向縄手に出て、東側第一の宅地の西方角（西北角…筆者註）なり」とあるのが、この石のことと思われる。藩士長

\*萩市郷土博物館学芸員

富佐兵衛が命を受けて石を立て、萩の城下町をつくるときの測量の起点にしたと伝えられる。

玄武岩の切り石で、長さ約123cm、周囲約100cmの柱状をなし、5ヶ所のタガネ跡がある。半分は地中に埋設され、文字などは彫られていない。

昭和42年（1967）、道路拡張のため移設されたが、元の位置は路面に花崗岩で表示してある。

現在の説明板では、指定当初の台帳のように、「萩城下街割原標石」が設置された年代は限定されてなく、この石が測量の起点にされたという文言も断定的ではない。

しかし、いずれにせよ、現在の説明板も指定当初の台帳も、「萩城下街割原標石」の典拠史料を安藤紀一著『萩史料』中の「鳥田智庵記」に求めている。果たして「史跡萩城下街割原標石」は、萩の城下町をつくるときの測量の起点とされたのか、本稿では「鳥田智庵記」を再検討することによって、「萩城下街割原標石」と呼ばれる石の設置目的と設置年代を明らかにし、今までの通説に疑問を呈したい。

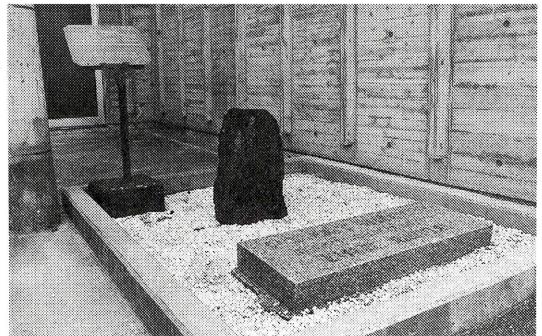
## 2. 石設置の目的

安藤紀一著『萩史料』は、慶長13年（1608）の項に次のように「鳥田智庵記」を集録している。

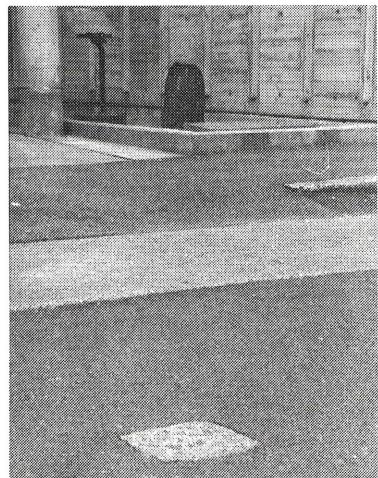
萩ノ正中ハ米屋町ヨリ江向縄手ニ出デ、東側第一ノ宅地（世ニ之ヲ大西屋敷トイウ）ノ西北角ナリ、<sup>(4)</sup>當時長富佐兵衛命ヲ承ケ、石ヲ立テ之ヲ表ス、今尚存セリ

この史料を素直に解釈すると、「萩城下の真ん中は、米屋町から江向縄手に至る通りにある。その通りの東側、一番最初の屋敷の西北角に位置している（その屋敷は大西氏の屋敷である）。その頃長富佐兵衛は命を受け、石を立てて萩城下の真ん中を表した。今なお、その石は存在している」となる。

この史料のどこにも、萩城下建設の際の町割の話は出て来ない。しかも、この史料の前項に同じく次のように「鳥田智庵記」を集録している。



現在時の「萩城下街割原標石」



現在時の「萩城下街割原標石」（手前の埋め込み石は旧位置）

萩ノ街路ノ幅狭キハ吉川広家ノ意ニ出ヅ、毛利氏封国減ジテ城下往来ノ人従テ減少スペク、  
街路広キトキハ行人稀疎ニシテ寂寥ナルベシトナリ<sup>(5)</sup>

この史料こそが、萩城下の街路設定すなわち町割の話である。

このように、安藤紀一が自著『萩史料』中の慶長13年の項に、町割にかかる史料とともに、石を立てて萩城下の真ん中を標示したという史料を集録したために、後学たちが拡大解釈して、慶長13年に萩城下の町割の際に測量の起点としてこの石を立てたという説が定着したものと考えられる。

こうして、本来は萩城下の真ん中を標示した石は、後学たちによって「萩城下街割原標石」と名付けられ、萩城下建設の際の測量の基準石として誤って伝えられることになったのである。<sup>(6)</sup>「萩城下街割原標石」は、この石の設置目的からすると、「萩城下正中石」または現代風に言えば「萩城下中央標示石」とでも名付けられるものなのである。

### 3. 石の設置年代

「萩城下中央標示石」とでもいべき萩城下の真ん中の標示石は、いったいいつごろ立てられたものであろうか。

前述の安藤紀一著『萩史料』中の「烏田智庵記」に、長富佐兵衛がこの石を立てたとある。長富佐兵衛とは、どういう人物であろうか。

山口県文書館蔵毛利家文庫中の「譜録」に次のようにある。

長富左兵衛等珍

一左兵衛事、雲谷等宥弟子ニて罷居候処ニ、元禄十弐九月九日吉広公新知賜三人扶持銀  
三百目、寺社組被成御附、御奉公申上、御奉書写有之、左ニ記之<sup>(7)</sup>

長富左（佐）兵衛は等珍と号し、萩藩の御抱絵師雲谷等宥の弟子であったところ、元禄12年（1699）9月9日に4代萩藩主毛利吉広に召し抱えられ、絵師として寺社組に付け置かれたといふ。また、同じく「譜録」中の長富家の系図によれば、左（佐）兵衛は長富家の初代で、当初前大津郡豊原村（現在、大津郡三隅町）の浪人であったといい、享保15年（1730）5月16日に72歳で死去したとある。

「烏田智庵記」には、「長富佐兵衛命ヲ承ケ、石ヲ立テ之ヲ表ス」とあるから、長富左（佐）兵衛は、藩主毛利吉広に召し抱えられた元禄12年以降、死去する享保15年までの間、すなわち18世紀の前半ごろにこの石を立てたと考えられる。

また、「烏田智庵記」によれば、この石を立てた地点は、「米屋町ヨリ江向縄手ニ出デ、東側第一ノ宅地（世ニ之ヲ大西屋敷トイウ）ノ西北角ナリ」とある。山口県文書館蔵毛利家文庫中の享保10～14年（1725～29）ごろの萩城下町絵図によれば、「東側第一ノ宅地」は「烏田智庵記」に記されているとおり、「大西彦左衛門」の屋敷となっている。これ以前の絵図には、大

西の屋敷はないので、萩城下の中央を標示するための石は、やはり18世紀の前半に立てられたことが裏付けられる。<sup>(10)</sup>



享保10~14年（1725~29）ごろの萩城下町絵図（部分、山口県文書館蔵）  
矢印が「大西彦左衛門」の屋敷

#### 4. 結びにかえて

17世紀初頭、萩城下建設の際、町割の起点とされたという「萩城下街割原標石」は、実は萩城下の中央を標示するために18世紀前半に立てられたものであったことが明らかになった。

それではなぜ、18世紀前半にわざわざ石を立てて萩城下の中央を標示したのか。その政治的・社会的な意味は何なのか。それを明らかにするのが今後の課題であるが、ここでは萩城下の中央を記した史料を紹介して結びとしたい。

「鳥田智庵記」と同じく鳥田智庵が著した「萩古実」に次のようにある。

江向米屋丁縄手萩正中之印石有、此屋敷蓮池院旧地と云説有<sup>(11)</sup>

「萩正中之印石」とは、「鳥田智庵記」に記されている萩藩絵師長富佐兵衛が立てた石のこととで、江向の米屋丁縄手（米屋町下り筋）に萩城下の中央があるという。

「萩市中覚書」は、萩城下の中央を次のように記している。

袋町筋之東慶安橋ニ至る所に有、橋詰より西之方へ行程、是則當所中央之地也ト云<sup>(12)</sup>

新堀川にかかる慶安橋から西の筋、萩城外堀の東側にある袋町の東の筋、現在の南吉萩町を東西に横切る道路上に、萩城下の中央が位置するという。

江向の萩市民球場の北にあった田中荒神社も、萩城下の中央であったという。『防長寺社由来』『行程記』『八江萩名所図画』に、それぞれ次のように記されている

田中一本松濫觴ハ所柄萩中央ニ付、松一本為驗木被植置鎮守の社ニテ、昔より一本松荒神<sup>(13)</sup>と唱來り候由申伝候

（『防長寺社由来第六卷』）

当社田中荒神ハ民間古老の説ニ、萩中央之地成ニヨツテ松樹一本ヲ植置、荒神祠を建當所<sup>(14)</sup>之地神ト祭リ、次第二繁昌セシ由

（『行程記』）

同所（慶安橋…筆者註）より東方一丁ほどにあり、世俗田中社といふ、又一本松荒神社といふ、そハいにしへ当所に大松一本ありて、枝葉繁茂せしより終に地名ともなりけり、或云、当所ハ萩市中の中<sup>(15)</sup>央とて、一株の大松を栽しとそ<sup>(16)</sup>

（『八江萩名所図画』）

田中荒神社の地は、萩城下の中央なので、その印として松一本を植え、荒神社として祭った<sup>(17)</sup>という。慶安5年（1652）の萩城下町絵図にも、松の大木が描かれている。

註（1）安藤紀一は、慶応元年（1865）～昭和10年（1935）。明治18年（1885）山口県師範学校を卒業後、萩の明倫小学校訓導に任せられ、ついで同校の校長となった。

明治34年（1901）県立萩中学校教諭に転じ、在職14年のうち、同校の嘱託をつとめた。昭和5年（1930）山口県教育会より『吉田松陰全集』の編纂委員を委嘱され、その任を果たした。深く郷土史を研究し、著述に『松陰神社温故録』『滝鶴台事蹟』『山田原欽伝』等がある。（『近世防長人名辞典』マツノ書店、1976年、33ページ）

（2）昭和10年（1935）刊。安藤紀一が旧記・古談及び自らの見聞によって得られた史料をもとに、萩を中心とした諸事件、諸項目を慶長9年（1604）から大正15年（1926）まで編年体で記述している。（『防長史料文献解題』マツノ書店、1989年、76ページ）

（3）「烏田智庵記」は、安藤紀一が『萩史料』に引用しているが、原本・写本とも所在が不明である。

なお、烏田智庵は、元禄2年（1689）～明和5年（1768）。初め儒学を山県良斎に受け、家業の外科を父の高弟岡田某に学んだ。のち京都に遊學し、医学を浅井周迪の門に修め、また松岡玄達について本草学を学んだ。帰国後藩に重用され、仁保玄珠とともに命を受けて防長両国の物産調査にあたり、ついで薬園役に任せられた。著述に『萩古実未定之覚』『筑山屋形盛衰記』『長防産物名寄』等がある。（『近世防長人名辞典』マツノ書店、1976年、92ページ）

（4）『萩史料』（4～5ページ）

（5）『萩史料』（4ページ）

（6）『萩市誌』（萩市役所、1959年、114ページ）『萩図誌』（萩青年会議所、1978年、36ページ）『萩市史第一巻』（萩市、1983年、196ページ）とともに、この石が萩城下建設の際の測量の基準石となつとしている。

なお、指定台帳に「萩城下街割原標石」の側に昭和14年（1939）に設置した石製標柱が建立してあると記されている。この標柱は現存しないが、文化財指定当初の写真を見ると、「築城当時街割元標石」と刻まれているのが分かる。安藤紀一の『萩史料』が刊行されてまもなく、この石が萩城下建設当時の町割の基準石として標示され、通説化していったものと考えられる。

（7）「長富吉左衛門勝房」（毛利家文庫、23譜録な138）

（8）寺社組とは、儒者・医師・絵師・茶道・能狂言師など芸能をもって仕える者で構成した階級の総称で、寺社奉行がこれを統轄した。（『山口県近世史研究要覧』マツノ書店、1976年、90ページ）

（9）「萩城下之図」（毛利家文庫、58絵図415）

（10）天和2年（1682）ごろの萩城下町絵図（「当島宰判萩城下絵図」山口県文書館蔵、袋入絵図256）では、「井上源右衛門」の屋敷になっている。

（11）「萩古実」（山口県文書館蔵、多賀社文庫60）の成立年代は、18世紀中ごろと思われる。

（12）「萩市中覚書」（山口県文書館蔵、県庁伝来旧藩記録799）は作者不明で、成立年代は18世紀中ごろと思われる。

（13）現在は塩屋町の多越神社に合祀されている。

（14）『防長寺社由来第六卷』（山口県文書館、1985年、148ページ）の「田中荒神社・二森荒神社由緒覚書并春日吉神主由緒書」の項にあり、明和7年（1770）藩に提出された。

（15）「行程記」（毛利家文庫、30地誌41）は18世紀の中ごろ、萩藩の地理図師有馬喜惣太が、藩主の参勤往復路を描いた道中絵図で、必要に応じて寺社・旧跡等に起源・沿革その他の説明が記されている。（『防長の古地図』山口県立山口博物館、1984年、『山口県文書館史料目録二』山口県文書館、1965年、105ページ）

（16）『八江萩名所図画』は萩の名所・寺社などの風景と沿革を絵入りで描いた木版刷りの冊子で、木梨恒充が天保5年（1834）に起草し、その後を山県篤蔵が引き継ぎ、明治25年（1892）に刊行された。（『八江萩名所図画付録』マツノ書店、1990年、1～4ページ）

（17）「萩絵図」（毛利家文庫、58絵図409）

# 金谷天満宮造替に伴う礫石経について

\*柏本秋生

八日 天氣 (寛政2年 = 1790・3月)

一 小石 三俵

右法華経写、長藏寺隠居去年已来追々被相調置ニ付今日取寄、御社下地突所え納候事、尤も右の儀ハ大田弥右衛門より寄附の事

(『金谷天満宮造営日記』)

## 1. はじめに—礫石経（れきせききょう）について

礫石経とは、その名のとおり、円礫あるいは角礫に経文を書写したものである。礫の大きさは大きなものは拳大程度のものから、小さなものは大豆程度のものまで見受けられるが、書写の容易さなどから、だいたい碁石程度のものが標準かと思われる。経文は墨で書かれることが大部分である。

これらは書写の形態から、石1個に1文字を書写する「一字一石」と、複数の文字を書写する「多字一石」に2分される。「一字一石」の場合、2文字以上書けるスペースがあっても、1文字しか書いていないので、石と経文の1対1対応に意味があったと思われる。複数字の場合は、2文字や3文字ではなく、経文の章句単位で書かれる事が多く見受けられる。

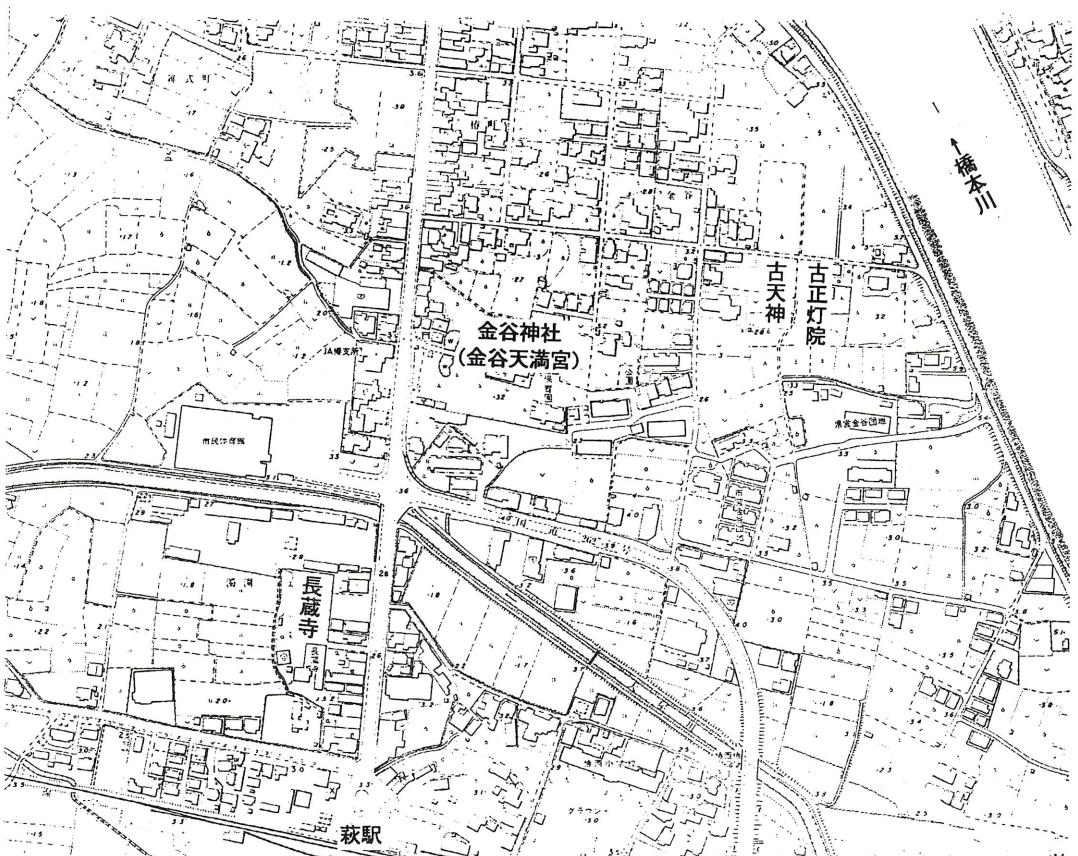
いずれにしても、一旦書写してしまえば、経文を復元することはまず不可能となる。書写が終了した直後の状況を想像すると、夥しい量の「漢字が書かれた小石」が山積みされている風景が目に浮かぶ。書写されることが多い「法華経」であれば、経典の総文字数は69,384字であるから、それこそ小山の様な状態であろう。

この礫石経は、そのままの状態でおかれることはまずない。ほとんどが土中もしくは石造塔の中などに納められる。このような埋納状態を「礫石経塚」と定義する。地表に埋納を記録する標識が建てられている場合、石碑形であれば「経碑」、石塔形であれば「経塔」と呼ぶ。石仏を伴う場合も多い。

礫石経自体、あるいは経碑の持つ記年銘から見ると、礫石経は中世以前に遡るものも若干あるけれども、その流行の最盛期は近世であることがわかる。

また、経碑の願文等を収集してみると、目的には先祖先靈供養、後世安穏、五穀豊穣等を祈るものが多い。その中で、微妙に礫石経の立場が異なるものが見受けられる。つまり目的のた

\*萩市郷土博物館学芸係主任（兼任）



めの行為は他にあって、礫石経は、い  
うなればその添え物といった状況であ  
る。具体的にいえば、目的は「経碑を  
建てる」とあって、その下に礫石  
経を埋める場合や、「塚を作ること」が  
先にあって、その中に礫石経を埋める  
といった状況である。これらの状況に  
おいて、礫石経に期待されているのは、  
「経碑が倒れないように」あるいは「塚  
が崩れないように」といったことの、

地鎮、すなわち魔除け的な意味であると思われる。そうした状況から推定すると、碑や塚のみ  
でなく、建物などの地鎮に応用されることも考えられる。

礫石経（塚）は、かなり多数が各地で発見されている。しかしながら、具体的な造営法につ  
いては、経碑に記された内容以外の文書記録等は少ない。そのような状況の中で、今回、萩市  
郷土博物館で活字化された『金谷天満宮造営日記』の中に、礫石経の使用法等の記述が認めら  
れた。そこでこれを紹介し、合わせてその意味を考えてみたい。



写真1 金谷神社（金谷天満宮）

## 2. 金谷天満宮とその造営

金谷天満宮は、毛利氏の萩入城以前から存在したといわれる神社である（註①）。社伝その他によれば、鎌倉時代、佐々木高綱の勧請という。社坊として正灯院があった。江戸時代初期には、松本川に近い場所にあった。この場所は現在でも「古天神（ふるてんじん）」と呼ばれ、向かい側の「古正灯院」と合わせて残っている。秋の例祭はここから始まる。

享保5年（1720）、金谷天満宮をこの古地から、現在地に移転することになった。社地に隣接して大木戸があり、城下町の入口といえる場所である。城下町に災厄が入ってこないようにという意図もあったと考えられ、実際に享保17年（1732）の蝗害の際には、藩に願って萩市中の盲僧50数名による大規模な地神祭を催し、五穀成就を祈願している（註②）。

移転から約70年が経過した寛政元年（1789）、社殿の老朽化が進んだため、改築が実施された。工事は寛政元年7月18日に再建の手斧始めの儀が行われ、約1年4ヶ月後の翌寛政2年11月26日に棟上げ式が実施されている。この間の記録が「金谷天満宮造営日記」である（註③）。

## 3. 磯石経に関する記述

造営開始から約半年が経過した寛政2年3月8日の条に、本稿冒頭に掲げた記述が見られる。この日、小石3俵が神社の造営現場へ持ち込まれた。長藏寺の隠居が書きためていた磯石経で、「去年以来」とあることから、少なくとも3ヶ月は要したことがわかる。

長藏寺とは金谷天満宮から約100m程離れた臨済宗の寺院である。明治以後に金谷天満宮の社坊である正灯院を合併して現存している。。

さて、造営開始以来この日までの主な現場作業は、地突きすなわち建物の基礎地業である。これは町単位で盛大に、かつ念入りに行われている。同日にも地突きの16回目が下五間町の人々によって実施されていた。

なお、この磯石経は、大田弥右衛門が寄附していることがわかる。大田弥右衛門は、記録中に何度も出てくる人物で、「役人」とされている。

この文面からは判然としないけれども、もし一字一石経であれば、法華経の文字数である69384個はあったものと思われる。また、8巻からなる法華経を、巻ごとではなくてまとめて3俵にしていたこともわかる。しかし、この磯石経がその後どうなったのかは不明である。地突所に納められたことからすると、地突きの際に基礎地業に突き込まれた事が考えられよう。一方、他の事例では、建物の基礎地業内に土壙を設け、磯石経を埋納していたものがある（註④）。筆者はまだ実際に床下に入って確かめていないけれども、床下で磯石経を見たという証言もあるので（註⑤）、何とも言えない。確認する必要があろう。

いずれにしても、この磯石経が、建物の造営に関わりがあることは明らかである。すなわち経塚造営以外の磯石経の使用法を、文献で確認できたことになる。

#### 4. 市内の他の礫石経塚

礫石経の大多数が、土中や塔中に納められて経塚となることは先述した。萩市内の寺社や墓地などで、「経碑」を見ることが多い。これらの経碑の下には、礫石経が埋納されていると思われるが、確認することは困難である。まずは地表に表れている経碑の内容の検討を行う必要がある。ここでは筆者の管見に触れた礫石経塚、及び記録上に現れた経塚について簡単に紹介する。資料は今後も増えるものと思われる。また、「経塚」と考えられるものはこの紹介分以外にも多数ある。おそらくはほとんどが礫石経塚であると思われるが、「一字一石」等の文字が明記されているものに限った。

1. 大島八幡宮経塚 大島は萩沖の六島のうち最も大きい島である。その大島八幡宮の境内に、笠付き六角柱形の経碑が建っている。下部がいけ込みになっており、文章が確認できない部分がある。正面に「奉書写大乗法華經一字」「右側面に「生國氏陽江荷長州萩願主物源淨接持」、左側面に正徳5年（1715）の年記があり、背面には「大島氏家施物以志造立之」とある。願主の行にやや意味の不明なところがあるけれども、大島の住民が私財を提供したことが伺える。現在確認しているところでは、萩市で最古の礫石経塚である。
2. 弘法寺1号経塚 弘法寺はもと浮島と呼ばれていたところに位置し、石造物が多い。境内には巨大な宝篋印塔や、芭蕉に関するおぼろ塚などがある。この経塚は、経碑の記述から、享保8年（1723）に金光明最勝王經を一字一石に書写したものであると知られる。目的は五穀成就である。また、経碑表面下部に、毘沙門天かと思われる像を半肉彫りで表す。
3. 亨徳寺1号経塚 亨徳寺は臨済宗の寺院である。北古萩にあり、三門は市指定文化財となっている。この経塚は「防長寺社由来」に記載されたものであるが、現物は確認されていない。高さ1丈6尺5寸（約5m）の宝篋印塔で、塔の内部には大日如来の木像をまつりこれを本尊とする。そして塔の下に、法華經全部、大般若經前後巻、金剛經、宝篋印陀羅尼經、その外諸真言、諸陀羅尼を「一石一字三礼」に書写して納めたという。明和明和5年（1768）建立。
4. 長蔵寺経塚 長蔵寺は金谷天満宮の造営日記にも出てくる、隠居が礫石経を書写した寺院である。この寺の境内にも経塚があるけれども、形態が錯綜している。そのままに記述すると、最上部に地蔵菩薩半跏像、次に「三界万靈」と記された、宝暦6年の年記のある六角形の塔身、その下に「一石一字 法華塔」と記された四角形の塔身がある。宝暦年間のものは礫石経であるか不明である。しかしながらその下のものは明らかに礫石経塚であり、さらに判読が困難ながら、享保年間の死人の三十三回忌の供養として明和年間に造営されたことがわかる。また、造営者は「当町中」で

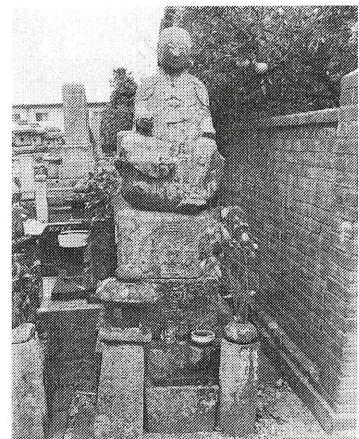


写真2 長蔵寺経塚

あり、萩城下町全体で行われたと思われる。このような扱いをされる享保年間の死人といえば、先にも出てきた蝗害、すなわち虫枯れによる被害者と考えられる。金谷天満宮と同じく城下町の入口にあるこの寺院に、こうした経塚が造営されているのも興味深いところである。

5. 龍藏寺 1号経塚 龍藏寺は中津江に所在する寺院で、境内の觀音堂の軸部は中世に遡ると考えられる。この経塚も上部に半跏の地蔵菩薩像を乗せている。台石の正面には「法華塔」と大きく刻み、その左右に「一字」「一石」とあるので、内容は明らかである。さらに側面には「先祖菩提」と目的が刻まれている。願主は光永吉右衛門の母。全体のバランスからいうと、地蔵菩薩像が大きく、造立の主眼のようにも思える。寛政 12 年（1800）の建立。

6. 旧福正寺経塚 福正寺は椿に所在した寺院で、現在は廃寺となっている。山本勉弥の著作中にこの経塚についての記述がある。（註⑥）それによれば椿の田村慶一氏の畠（旧福正寺境内）から経石が多く出土した。その年代については不明であったが、昭和 24 年（1949）に文化 5 年の年記をもつ経石が出土したという。この経石は萩市郷土博物館に保管されており、長さ約 10cm 程の楕円礫で、中央に「南無阿弥陀仏」左右に「文化五辰年」「四月廿一日」とある。萩市において、経石自体に記年銘が確認されているのはこれのみである。

7. 海潮寺経塚 本堂の前に建つ。この経塚は昭和 48 年に再興されており、現在の標識は宝篋印塔となっているが、その隣に従来の経碑が現存している。高さ約 80cm の尖頭角柱形で、正面には「奉誦誦大乘妙典二千部成就供養之塔」とある。すなわち塔の目的としては礫石経ではなく、法華経を 2000 部読誦したことを記念する塔である。ところがその下に、「一石数字書写一部収於塔下」とあり、塔の下には法華経の礫石経が埋納されていることが判る。背面には読誦した 2000 部を半分にし、1000 部は両親（考妣）の為、1000 部は累代先祖及び眷属の靈供養の為、そして一石数字の礫石経は、六道四生一切含識の為であると記されている。読誦した經典に期待する功德が、極めて個人的、家的であるのに対して、礫石経の目的は社会的であるといえるだろう。

8. 龍藏寺 2号経塚 №.4 同じ寺院の境内に建つ。高い基段をもつ宝篋印塔で、上部塔身に「大乘妙典 一字 一石」の文字が入る。下部塔身には大日如来の石像を安置する。また背面に天保 9 年（1838）の年記がある。この経塚の特徴は、人名が多数刻まれていることである。まず、塔の背面に「願主沙門玄薬」「船底的水信士」「浅原先祖菩提」「平吉両親先祖菩提」とある。これらの人名がどのような関係にあるのかは不明である。さらに台石の正面には、「大通堅中禪師」「梅林令州禪師」「当山大典禪師」「善福大玄禪師」「徳隣信叟禪師」の 5 人の名が



写真 3 龍藏寺 1号経塚

ある。これらはいずれも臨済宗南禅寺派の寺院の住職と考えられる。大通寺、梅林寺は山口市の寺院、当山は龍藏寺、善福寺は市内川島、徳隣寺は市内江向である。これらの人名以外にも、塔の基段には多数の戒名が刻まれている。これらがすべて、先祖にあたる人物なのかもしれない。浅原家について、さらに調査が必要である。

9. 周鷹寺経塚 周鷹寺は萩市大井に位置し、毛利氏入府以前に勢力を持っていた、吉見氏の菩提寺である。経塚は四角形の石櫃状をなし、上部に亀に乗った地蔵菩薩像を置く。「亀地蔵」の名がある。建立年代は明治2年。御住職の話によると、数年前に修理した際、内部から礫石経が出てきたという。石櫃の背面には納入孔があり、礫石経の追納が可能な形態になっている。
10. 弘法寺2号経塚 №.2と同じ寺院境内に建つ。年代は記されていないが、最上部に如意輪觀音像を置き、その台石に「大乘妙典一石／一字供養之塔」と2行に刻む。如意輪觀音像は小振りであり、主眼は経塚であると推定される。背面には「為」字の次に、「光空量壽伯大姉」「拙翁壽山久福居士」「謹建之」と刻む。
11. 徳隣寺経塚 徳隣寺は萩市江向に所在する。萩藩永代家老福原家の菩提寺である。本堂前に、ほぼ等身の花崗岩製地蔵菩薩立像があり、台座に「大乘妙典一字一石」の文字がある。像の台座背面下部に、長方形の孔があり、地中に石室が設けられているのを確認することができる。したがってこの孔は追納のための納入孔であるとわかる。

## 5. 磕石経の目的と儀式

さて、金谷天満宮の礫石経に続いて、萩市内に残る礫石経塚を紹介した。これらを概観して気付くところを述べよう。まずはなぜ、礫に書写するのかという根本的な疑問である。私は以前、宇都市の東隆寺一字一石経塚出土の経石整理を担当したことがある（註⑦）。そのときはまず、その量の多さに圧倒された。法華経で7万個近い小石を集めることは容易なことではない。さらにその全てに文字を記した状況は、まさに目に見える功德といったところではないかと思われる。しかも東隆寺経塚では、筆跡から3人の書写人の存在がうかがえた。すなわち礫石経に一番ふさわしいキーワードは「多数」ということであろうと思われる。

次に目的としては「供養」または自分自身の善行としての「作善」が圧倒的に多い。その中で金谷天満宮の礫石経の様に、建物等の安泰であることを望む、「地鎮」の目的も見受けられる。紙の經典でも可能な様であるが、「石」という素材のもつ堅牢性から選ばれるものであろうか。また、実際の建築でも礫はよく用いられるから、建築資材のとしての石に経文を書くという、い

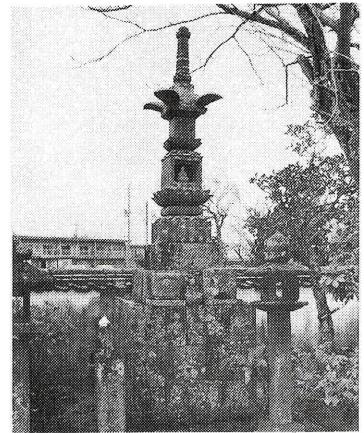


写真4 龍藏寺2号経塚

わば逆の発想で、礫石経になる場合があるのかもしれない。「作善」という面では、これは関秀夫氏も指摘されているところである（註⑧）が、「多数作善」つまり海潮寺経塚にも見られる千部、二千部といった經典の読誦等の行為が中世以降盛んに行われるようになる。これは個人で多数という意味だけでなく、多数の人間の参加ということにも繋がってくると思われるのである。そこには何らかの儀式もしくはイベントが必要になってくるであろう。残念ながらこうした礫石経（塚）の発起（計画）から完成までを記した文書や経碑は寡聞にしてまだ知らない。しかしながら当町中で造営された長蔵寺経塚のように、蝗害による死者供養に参加する際には、例えば参加者が一握りづつの礫石経を埋納孔に投入するような行為が、参加しているという連帯感を醸しだすのに有効なのではないか。これは、私が東隆寺経塚の報告書にも記述したことであった。さらには礫石経の造立願文の中に「五穀成就」も多く見られることから考えると、「礫石経の山」を「穀物（種）の山」に見立てることもあったのではないかと思われる。

これらの儀式については、実際の遺物から見いだすことは困難である。夥しい量の江戸時代文書に、気付かれないまま記述されているのではないかと考える。例えば、防長寺社由来に次のような記述がある。

#### 一 経塚 壱ツ

但、経石は秋穂浦の沖竹島と申島より取り寄せたる基石の由、（中略）右の経塚出来候時分は古跡寺より人々立并候て、てん手に取渡築申経塚と承伝候事

（『防長寺社由来』佐山村 正法寺）（註⑨）

記述は簡単であるが、多数の人が参加した様子がうかがえるものである。

#### 6. ま と め

今回紹介したのは、江戸時代後期、寛政2年（1799）に、金谷天満宮の造替に伴い、建物の基礎に埋納されたと思われる礫石経である。また市内に現存する礫石経塚も併せて紹介した。

建物の基礎地業に埋納された可能性が高い今回の経石が、もはや経塚と呼べないことは明らかである。その目的は建物の堅固を、精神的に支えることであったと思われる。これが江戸時代に一般的に行われていたかどうかは不明であるが、こうした資料がなければなかなか検証できない事例ではないだろうか。また、経塚として造営される場合にも、願主（主催者）があり、書写人があり、協力者があったと思われるし、ただ埋めるのではなく、何らかの儀式を伴っていたことが想像される。今後類例・資料の増加を図りたい。

<註>

- ①明治6年に金谷神社と改称し、現在に至る。
- ②『萩市史』第1巻 P475。
- ③ただし底本は、原本が虫喰で破損したための写本であり、一部欠落しているところがある。
- ④埼玉県飯能市宝蔵寺本堂、徳島県鳴門市長谷寺毘沙門堂下等。
- ⑤山本勉弥『萩付近の史実』1951 中の「萩の経石」の項に次の記述がある。「(前略) 尚一つ附記すべきは故人となつた椿町の柳井正一氏の話によれば幼少の時、金谷天満宮社殿の床下に経石のあつたことを記憶すと云ふ、此は何か祈願事があつた為であらう。」
- ⑥前出⑤文献同項。
- ⑦宇部市教育委員会『東隆寺一字一石経塚』1988。
- ⑧関秀夫『経塚のその遺物』日本の美術 292 1990。
- ⑨『防長寺社由来』

萩市内の礫石経

	名 称	建 立 年	書 写 経 典	標 識	書 写	願 意
1	大島八幡宮	正徳4 (1714)	法 華 経	七 角	1字	不 明
2	弘法寺 1号	享保8 (1723)	金光明最勝王経	石 碑 型	1字	五穀成就
3	亨徳寺 1号	明和5 (1768)	法 華 経 外※	宝 築 印 塔	1字	不 明
4	長 藏 寺	明和年間	法 華 経	地藏菩薩像	1字	死人供養
◎	金谷天満宮	寛政2 (1790)	法 華 経	建 物 基 礎	不明	不 明
5	龍藏寺 1号	寛政12 (1800)	法 華 経	地藏菩薩像	1字	先祖供養
6	旧 福 正 寺	文化5 (1808)	不 明	不 明	不明	不 明
7	海 潮 寺	文政6 (1823)	大 乘 妙 典	宝 築 印 塔	多字	先祖供養
8	龍藏寺 2号	天保9 (1838)	大 乘 妙 典	宝 築 印 塔	1字	先祖供養
9	周 鷹 寺	明治2 (1869)	不 明	地藏菩薩像	不明	不 明
10	弘法寺 2号	不明	大 乘 妙 典	如意輪觀音	1字	故人供養
11	徳 隣 寺	不明	大 乘 妙 典	地藏菩薩像	1字	不 明

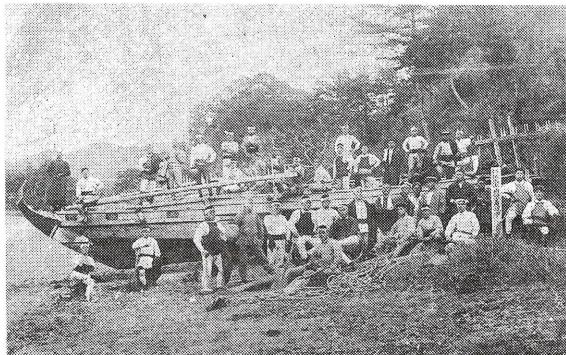
# ふかはえなわ 鰯延縄漁と萩地方漁船の朝鮮半島近海への出漁

\* 清 水 満 幸

## 1. はじめに

萩地方の鰯延縄漁（鮫を漁獲する延縄）については、明治19年（1886）に編集企画され明治43年（1910）に刊行された『日本水産捕採誌』に、「（鰯）底延縄に至ては、豊後国佐賀関、長門国玉江浦、鶴江浦漁民の特技にして、近來某々の地方に於て該地より教師を聘し伝習せるものありと雖も未だ各地に遍ねからず、蓋し底延縄にて釣るべき鮫は、体躯殊に巨大にして勢い猛烈なるのみならず其栖息する所遠海の深底に在るが故に、最も勇悍なる漁者にあらざれば出漁に惶るを以てなり」と紹介されている。

鰯延縄漁がいつの頃より始められた漁なのか、どこで開発されどのように発達した漁なのかは、現段階では良く分かっていない。ただ、萩市鶴江浦や萩市玉江浦の漁船が、早くより、遠海においてこの漁を中心操業し実績をあげていたことや、ツルエブネ（鶴江船）と呼ばれる独特の船型の和船が存在し、鰯延縄漁に用いられる堅牢な漁船が先進の漁船として他地方に紹介されたことなどが、伝承や記録から確認できる。



鶴江浦の鰯延縄漁船と若連中（大正期）

鰯延縄漁は、萩地方の漁業を知るうえで特記されるべき漁法であるが、残念ながら伝承を含め資料集積は進んでいない。以下、断片的ではあるが、これまで記録することができたこの漁に関する伝承を記す。

## 2. 萩市の鰯延縄漁

鶴江浦〇氏（故人、明治37年生れ）によると、鶴江浦においては昔から鰯延縄漁を行ってきたが、特に氏の父親や祖父の代に盛んであったという。明治期には、オオブネ（大船）と呼ばれる鰯延縄漁が、鶴江浦だけで約80隻存在したという。1隻あたり8人程度が乗組んでいたということで、600人を超える人がこの漁に従事していたことになる。

氏の場合は、一年を通じて鰯延縄漁を行っていたわけではなく、他の例ええば甘鯛やレンコ鯛を漁獲する延縄漁も行っている。これら延縄漁や鰯延縄漁で朝鮮半島から中国大陸の近海まで出漁することを、鶴江浦ではナガレバエ（ナガレハエとも）と称していた。ほとんどの漁船が、

\*萩市教育委員会文化課文化財係長

このナガレバエで、1年の大半を他地方の港を根拠地にして操業を続けていたという。鶴江浦に帰港するのは盆正月に1カ月程度で、その間に、漁具を調えたり船を整備したりした。

鱈延縄漁の漁期は、旧暦5月から旧暦10月頃までで、盛期は旧暦7月から旧暦10月までであったという（玉江浦では、秋口から翌5月頃までともいう）。漁場は済州島の近海で、彼地を根拠地に操業した。漁獲する鱈には様々な種類があったが、6尺から9尺もある大きいものもいた。水揚げも彼地で行った。餌については、コマナワと呼ばれる延縄で、鱈延縄操業の合間に自ら漁獲するか、他漁船より求めた。鱈延縄は釜山より北で操業することは無かったが、シナ海や五島近海でも操業した。長崎、佐世保、伊万里、唐津、福岡、若松、戸畠、下関等に寄港し水揚げすることもあったという。

明治の初め頃は、氷が無いため漁獲した魚の貯蔵ができず、遠方への長期出漁が難しかったという。氏が漁を行う頃には、1トンから1.5トン程度の氷を船に積み込み、氷蔵して魚を運ぶことが出来るようになり、氷が解けるまでの間は漁を継続できた。

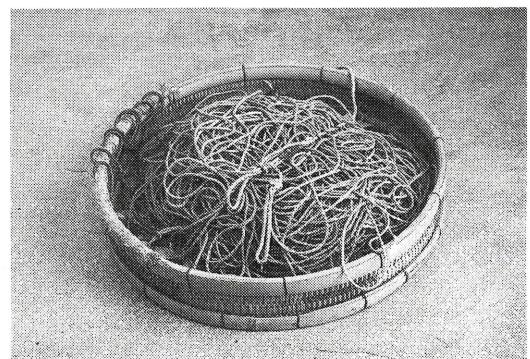
鱈延縄漁船には8人程度が乗組んだことは先に触れたが、乗組員はカコと呼ばれ、船主や船頭の関係者以外はヤトワレとも呼ばれた。鶴江浦の出身者以外に、他所から雇われて船に乗組む者も相当数いたという。ヤトワレの場合、大体2カ年が乗組みの期間とされた。また明治後半から大正初期にかけて、大船の船頭を務める者の家では、たいてい一人から数人の養子が居り、カコとして船に乗組んでいたという。これらの養子は、長じてから独立分家させたり、他の家に婿養子に入らせることが多くあった。

### 3. 鱈延縄漁の漁具

鶴江浦の場合、延縄の幹縄とテと呼ばれる枝糸は、当初は麻で自作されていた。阿武郡川上村からカワカミソと呼ばれる麻を購入し、細かく裂いて糸に紡ぎ、縫りをかけて太い糸にしていた。これを柿渋に浸することで、糸を丈夫にして扱いやすくすることができ、また腐りにくくすることができた。綿糸の導入は大正時代のこととされる。テの先の方には、鱈により噛み切られぬように針金の鎖を結んだ。

釣針については、大正時代の終わり頃から、大阪方面より購入するようになったという。それ以前は鋼線と罐で自作していた。これをゴヘイダバリと称していた。また当初はメ（カエリ）がついていなかったが、後に改良バリとてメのついた釣針が導入された。

玉江浦の場合、30年前まで使用していた鱈延縄は、幹縄に結ぶテが10尋間隔から20尋間

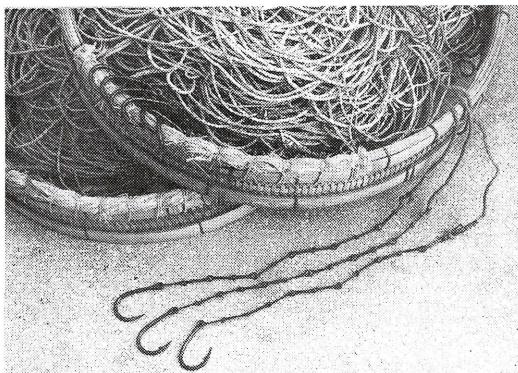


鱈 延 縄

隔であったという。ナワバチ（縄鉢、コーシキともいう）一つあたりのテは7~8本、つまり釣針は7~8本で、幹縄の延長は100尋から160尋程度ということになる。1回の操業で、これを30から50鉢分結び繋いで海中に延べていたという。玉江浦では、幹縄や枝糸の材質がラミ等に変わった他は、漁具そのものの形態はかつて使用したものとほとんど変わっていなかったという。

鱈を突き刺して弱らせたり引き寄せたりするための鉤は、地元の鍛冶屋に注文した。またこん棒については、カタギ（櫻などの総称）を扱う船大工等に注文したり自作したりした。

漁船については、ほとんど地元の船大工に注文し建造した。鶴江浦の鱈延縄漁船の場合、大きさは大体10トン程度で、当初は帆をヒイテ（上げて）遠方へ出漁していた。艤は、艤で1丁、ナカノマ（中の間）で2丁、オモテ（表）で2丁を使用した。ミヨシ（舳先）の形が独特で、ツルエミヨシとかクワガタミヨシなどと呼ばれた。甲板を張って船内に海水が溜まらないように造られた丈夫な漁船で、近隣ではツルエブネ（鶴江船）とも呼ばれていたという。漁船への推進機関の導入は、大正時代から昭和の初めにかけてとされる。



鱈延縄の釣針

#### 4. 朝鮮半島近海への出漁と漁家の養子

鶴江浦のM氏（明治43年生れ）、Y氏、T氏（大正5年生れ）や、玉江浦のS氏（大正3年生れ）、T氏（大正14年生れ）などによると、鶴江浦や玉江浦の漁船は、明治時代から大正時代にかけて（一部は昭和10年代まで）、盛んに朝鮮半島近海まで出漁し、鱈延縄漁で鱈を大量に漁獲していたという。操業した漁場として、済州島の沖、巨文島の沖、巨濟島の沖等の名前があがる。寄港先としては、上記の島の他に、釜山や蔚山、木浦などの名前もあがる。

当時の大船は8人程度が乗組んでいたが、良い乗組員を確保することは、現在も昔も変わらず重要なことであった。鶴江浦では、出漁船が増えると地元出身者だけで乗組員を確保することができず、多い時には100人を超える他所出身乗組員がいたという。そしてほとんどの大船の船頭の家では、他所出身の養子を迎える、実子として養育しながら自家の船にカコとして乗組ませていたという。

両浦の漁船は、鱈延縄漁で出漁し寄港した上記の島や港でも、乗組員や水揚げの作業員を雇っている。そして、彼地の子供を養子に迎え、実子として養育し、自家の船に乗組ませている。これらの養子は、他所出身の養子と同じく、長じると独立分家させたり他家に婿養子に入らせたりした。中には、ミョウセキヲツグ（名跡を継ぐ）とて養家の姓と家を継ぐ者もいたという。

例えば鶴江浦のY氏によると、氏の家では、済州島出身の子供を養子にしていたという。こ

の養子は金一と名乗り、実子として育てられ、氏とは兄弟の関係であった。氏の父親が、明治末年頃に濟州島で鱗の水揚げを行っていた際に、良く手伝って働き性格が好ましかった金一を、誘って船に乗組ませ、養子に迎えたものという。氏の家が鱗延縄漁を休止した後は、下関の手繰り網漁船に乗組むなど他所で独立して暮していたが、氏の家との行き来は亡くなるまで続いたという。

同じく T 氏によると、大正から昭和の初め頃にかけて、Y<sub>2</sub> 氏の大船には、通称キンニー（金兄）と呼ばれる朝鮮半島出身者が乗組んでいたという。キンニーは高等小学校を卒業した位の年齢で、メシタキ（飯炊き）として船に乗り始め、やがてオモテノリ（表乗り、甲板員）をしていましたが、長じての消息は分からぬといふ。

また玉江浦の S 氏によると、大正の初め頃から大東亜戦争の前頃までは、朝鮮半島出身者をモライゴ（貰い子、養子）にし、その家の実子として育てながら漁船に乗組ませることが少なくなかったという。養子に入った家を継いだり、玉江浦の漁船に乗って働いているうちに他家に婿養子に入ったりした朝鮮半島出身者を、4~5人は知っているといふ。また、朝鮮半島出身者は、玉江浦の漁船に限らず、当時導入され始めた発動機の機関士として船に乗組むことが少なかつたといふ。力が強く手先が器用な人が多かったとされる。

同じく T 氏によると、氏の父親が船頭を努める船で、朝鮮半島出身者と共に働いたことがあるといふ。鱗延縄漁で濟州島近海へ出漁し、釜山に寄港していた際に、申し出を受けて乗組員として雇い入れることになったといふ。当時、氏が知る限りでも数人の朝鮮半島出身者が玉江浦の漁船に乗組んでいたといふ。それらの者は養子に入っていたわけではないが、玉江の若者組に加わり、青年宿にも寝泊まりしていた。氏の先輩には、養子に入りその養家を継いだり、他家に婿養子に入ったりした者が何人かいたといふ。

以上断片的ではあるが、萩市鶴江浦と玉江浦の鱗延縄漁に関する伝承と、朝鮮半島近海へ長期出漁にかわりがあると考えられる朝鮮半島出身者の漁業従事、並びに養子迎え入れについてまとめてみた。

萩地方では、親友のことを方言でチングーと呼ぶ。このチングーという言葉は何を語源とし、いつの頃より使われているのか、どのような字をあてるのか等は分かっていない。ただハングルでも友人のことをチングと呼ぶといふ。鶴江浦や玉江浦の漁船の朝鮮半島近海への盛んな出漁操業と、上記のような事実を考え合わせると、萩地方で使われるチングーという言葉とハングルのチングという言葉の間には、なにがしかの関係があるようと思われる。

いずれにしても、鶴江浦や玉江浦の漁船の朝鮮半島近海への出漁の歴史については、今後丹念に調査し明らかにしたい。

## 〈史料紹介〉

# 杉家旧蔵久坂玄瑞書簡・高杉晋作書簡

\* 橋 口 尚 樹

## 1. はじめに

平成10年（1998）9月、吉田松陰の実兄杉民治の曾孫にあたる杉治彦氏から松陰の書簡約60通をはじめとする約100点の史料を萩市にご寄贈いただいた。このたび寄贈を受けた松陰の書簡は、昭和47年（1972）から昭和49年にかけて山口県教育会が刊行した、大和書房版『吉田松陰全集』にすべて活字化、集録されていた。しかし、寄贈を受けた史料のうち、久坂玄瑞と高杉晋作の書簡は未発表の史料だったので、ここに紹介することにする。なお解読文のうち、難読の文字の部分は□で空けておいた。先学のご教示を請いたい。

## 2. 久坂玄瑞書簡

前月廿三日之朶雲昨日到来、先以皆々様御清円被成御渡候由案心仕候、僕壯健疥癬一点も不発絶て御懸念ニ及不申候、陳ハ□仮養子之事幾重も御面倒奉恐入候、支配え之願書定て御取計(1)と奉存候、月性詩稿活字版如何相成候哉、無逸其外ニ嘱し置候得共、今に成就ニハ不相成と存候、爰元活字板工者之人心安者有之候、活刷之事謀見候処、美濃紙ニテ一枚六七文位ニテ摺呉候、是ハ見事ニ出来候由、隨分三文ニても出来候、表紙ハ百部十三四匁位ニ出来候、左スレハ三四両もアレハ五六十枚之立派之書物ハ百部余り上梓ニ相成候、是ハ余程利方と被考候、遺稿村塾ニテ成就不相成候得は早速詩稿□□可申候、然し是ハ最早余程力を尽候たければ成ル丈ヶハ其御地ニテ同志中御勉強御周旋可申候、遺稿未タ校正仕不得候処ハ大樂源太郎え御謀被下候様先日子大え申送候間、乍御面倒諸君え御相譚可申候、把山遺稿之事忠介(2)え御談し可申候、是ハ爰元ニテ活刷ニする如カス、態々鐫板するハ無益なり、忠介より遺稿を伝兵衛処迄差送との事約束ニ御座候処今以不来、如何相成哉御尋可申候、先師之討賊始末は格別嫌儀も有之間敷、匿名なれハ尚更之事御座候、先達て墓石之事ニテ御送之金五両桂小五郎え御預ケ置候分有之候、是金ニテ活刷可仕候、是金又々御国え帰スと申候甚面倒、墓石の方ニハ最更無用なれハ爰許ニ留置度候、僕御切手米之内ニテ御立返し仕度候、今格別入用と申ニハ無之候得共、上梓之資其外用心之為ニ仕度候間、何卒切手米之内ニテ御会計可申候、討賊始末清写御送可申候、奉願上候、此度暢夫も益々帰省ニ相決、念一日御發程候積不得已事ニテ候、先師行状墓碑銘之事暢夫(3)より委曲御聞可申候、亡兄訳書大抵既ニ陳腐ニ相成、甚残念御座候、翻訳ものハ日新故、陳腐

\*萩市郷土博物館学芸員

デハ格別上梓之致方も無之候、鴻儒ニ託□小伝なりとも託する積御座候、秋冷自重専一二存候、他在後鴻

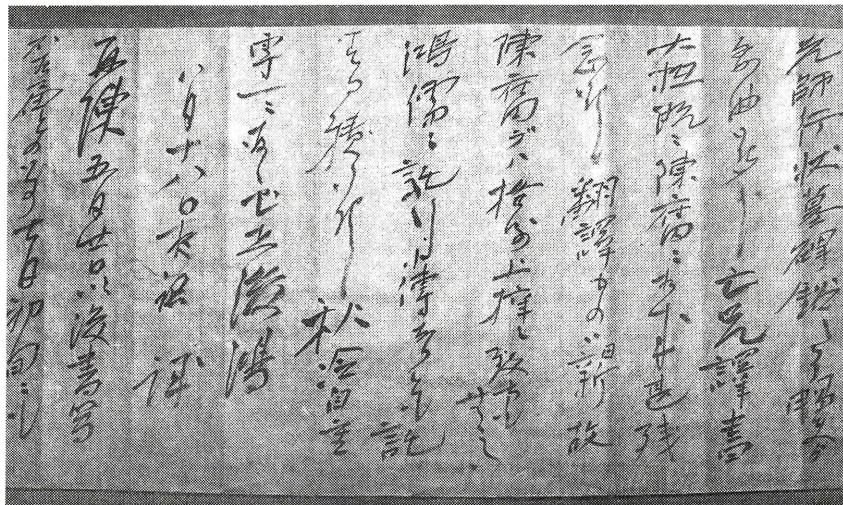
八月十八日夜認

(10)  
誠

再陳五月廿日以後書簡不相届との御事、七月初旬ニも一封差出候、如何間違候哉、逐々手向院(11)えも参詣仕候、秋風白楊雨地感悦候、爰許物価騰貴下民日窮する勢に相見候、嘆息、葡萄牙既去普魯士相踵、至夜ニ蠻礮撼天、此節之形勢見るに足る者無御座候、以上  
(12) 伯教老兄(13) 足下

(1) 僧月性 (2) 吉田稔磨 (3) 寺島忠三郎 (4) 口羽徳祐 (5) 坂上忠介 (6) 難波伝兵衛?  
(7) 吉田松陰 (8) 高杉晋作 (9) 久坂玄機 (10) 久坂玄瑞 (11) 回向院? (12) ポルトガル  
(13) プロシア (14) 杉梅太郎

この書簡は、吉田松陰の実兄杉梅太郎にあてたもので、年代は久坂玄瑞江戸滞在中の万延元年（1860）と思われる。



久坂玄瑞書簡（部分）

「松陰は遺書ともいべき『留塊録』の中で、「清狂の護国論及び吟稿、口羽の詩稿、天下の同志の士に寄示したし」（山口県教育会『吉田松陰全集第六卷』、295ページ）と遺言した。すなわち、僧月性と口羽徳祐（把山）の遺稿の出版を門人たちに託したのである。

「月性詩稿活字版」すなわち月性の遺稿は、吉田稔磨ら松下村塾生に活字出版を委嘱したが、なかなか完成しない。校正できない箇所は、大楽源太郎に相談するよう寺島忠三郎に指示したので、塾生らと検討してほしいと言っている。

次に「把山遺稿之事」すなわち口羽徳祐の遺稿は、坂上忠介（口羽徳祐の家臣）に相談するのがよい、当方で活字刷りするまでもないと言っている。

さらに、玄瑞は「先師之討賊始末」すなわち松陰が著した「討賊始末」を、桂小五郎に送金

し預けた五両で活字印刷したいので、「討賊始末」の清書を送ってほしいと依頼している。

これらに対して、「亡兄訳書」すなわち玄瑞の兄久坂玄機の翻訳書については、翻訳書は最新のものでないと陳腐になってしまうので、出版できないのは致し方ないと残念がっている。

松下村塾における出版活動については、安政5年（1858）5月の月性没後の翌6月、月性の遺稿『清狂吟稿』を出版することに決し、安政6年8月には久坂玄瑞を中心に松下村塾で月性の遺稿の活字印刷が開始されたという（蔵本朋依「志士たちと出版①」『マツノ通信1』、96～98ページ）。この書簡から松陰没後も、師松陰の遺志を継いで、松下村塾生を中心に月性の遺稿の出版活動が継続され、さらには口羽徳祐・松陰の遺稿の出版も検討されていることが分かる。そして、この出版事業には、松陰の実兄杉梅太郎も深くかかわっていたのである。

やがてこの出版活動は、慶応の終わりころから明治3、4年（1870、1）にかけて、松下村塾出身者によって「松下村塾藏板」として松陰や同志の遺稿の出版（蔵本朋依「幕末志士出版事情①高杉晋作著『投獄集』」「東行庵だより」No.81、9ページ）に結実するのである。なお、口羽徳祐の遺稿『杷山遺稿』は、旧臣坂上忠介によって明治16年（1883）5月に出版されている（田中助一「坂上忠介のこと」『史都萩』第34号、6～10ページ）。

また「先師行状墓碑銘之事」とあるように、実現はしなかったが、松陰の業績を記した墓碑を建立する計画もあったようである。

### 3. 高杉晋作書簡

七月十三日之尊翰相座奉拝誦候、如仰忽時勢変動承候得ハ、先日京城一戦有之分之由、実情  
實説承知可得仕候、幽室熟座心走□□夢寐□□不聞□御座候、世上の風説ニハ秋湖兄宍翁なと  
忠死と申事如何事ニ候哉、兎角偽説動き世中故、疑惑仕居候、此節ハ毎夜秋湖兄を夢ニ見候、旁  
以適ニ掛念仕居候、何卒実情御承知候処、早々御報知被下候様偏ニ奉願候、素より今日之時勢  
戦争ト可有之事ニ候得共、其始末分明□有之度奉存候、戦争の始ハ何等処より起り、終ハ何等  
之処ニテ引取ニ相成候歟申、始末承度御座候、戦の勝敗鄙言所謂時の運ニテ、楠公ト雖トモ敗  
軍被到事御座候、敗軍なれハ孔明の弾、減今勝なれハ棄愉快破大事ぬ様仕度事御座候、孤子能  
言不能行賞□□奴所能知也、不懼大敵不侮小敵、小事可慎大事不可驚、古今一理士道一貫申□  
候事ニ御座候、回先生遺書落手仕候、毎時御面倒之儀御頼仕奉恐入候、先ハ御尊大人御来状被  
下候処、其節有故御相対御断申上候所恙□□□被仰越候様奉頼候、御貴翰の御様子ニテハ余  
程御迫切御心中御尤之事ニ御座候得共、春風花昌不可撰、父子恩情不可忘、可死則死、不生則  
生、是大丈夫気象、釈前法談いつ□つ□□不堪欽慕因一筆愛走、如此

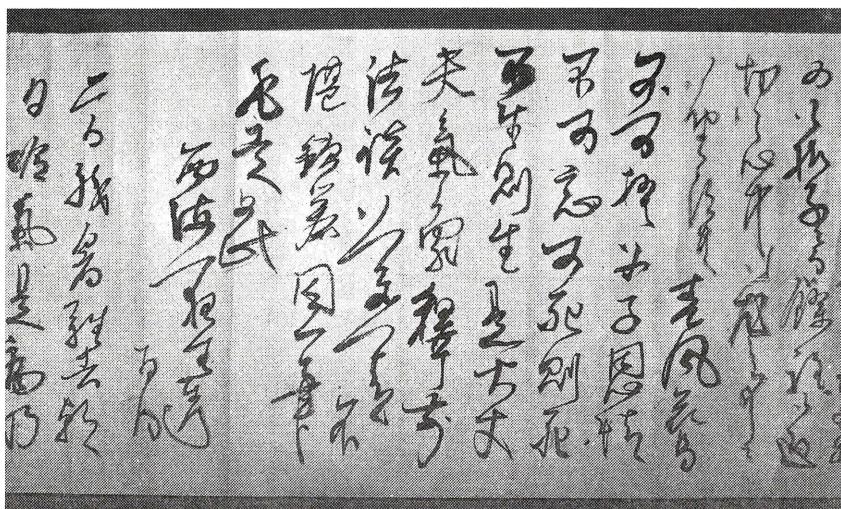
西海一狂生東行

拝面

二白残暑難去、朝日冷氣是病仍所、由來御用心專要ニ奉存候、何卒時勢御報知早々奉待候

- (1) 禁門の変 (2) 久坂玄瑞 (3) 宍戸左馬之介 (4) 楠正成 (5) 吉田松陰 (6) 杉百合之助  
(7) 高杉晋作

この書簡は宛て名はないが、おそらく吉田松陰の実兄にあたる杉梅太郎にあてたものと思われる。書簡の内容から、年代は元治元年（1864）7月ごろと推測される。



高杉晋作書簡（部分）

「先日京城一戦」とは、この年7月19日に勃発した禁門の変のことで、高杉晋作が脱藩の罪で投げられていた野山獄から出て、実家の座敷牢に謹慎していたところである。禁門の変に参戦した久坂玄瑞と宍戸左馬之介の安否を気遣い、京都の情報を早々に知らせてくれと懇願している。特に久坂玄瑞に対しては、「毎夜秋湖兄を夢ニ見候」と晋作と玄瑞との交情の深さを窺い知れる。

また「回先生遺書落手仕候」とあるように、梅太郎を介して松陰の遺稿を入手しており、野山獄中で晋作が松陰の遺稿を整理し、全集を作ろうとした企て（一坂太郎『高杉晋作の手紙』、142ページ）が、自宅謹慎中も継続されている様子が察せられるとともに、野山獄中時から何かと晋作の面倒を見てきた梅太郎の姿も垣間見ることができる。

この後8月3日、晋作は脱藩の罪を許されて、藩の手当用掛を命ぜられ、8月6日には藩の全権使節として下関で米・英・仏・蘭の連合艦隊との講話談判という大役をつとめることになる。

いずれにしても、この書簡は、罪を得て世間と隔離された状態にいる、晋作の鬱々とした焦燥感を漂わせている。

# 萩市大島の木本性植物

\*本田耕吉

## 1. はじめに

萩市大島は、萩市大井鶴山の北西2.2kmに位置する面積3.1km<sup>2</sup>、周囲7.7kmの島である。本島は、約19万年前の噴火によってできた溶岩平頂丘とよばれる平らな台地状をしており、標高は最高で128m、台上の平均は約100mである。対馬暖流の影響で温暖で、年間平均気温は15℃、年間降水量は1,600mm程度である。

島の土地の7割以上が宅地や農地として利用されており、森林は島の北東部や周囲部・丸山周辺に限られている。1996年4月から1998年10月にかけて、自生している木本性植物の種類及び、生えているようすを調査した。

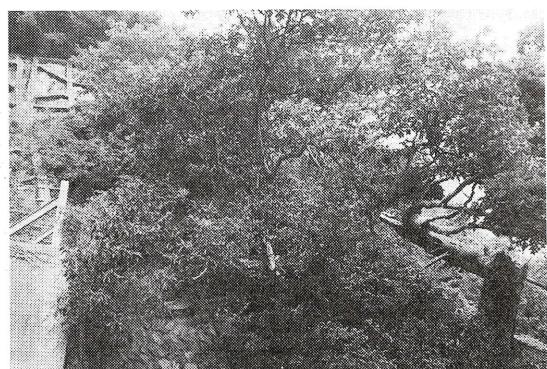


平らな溶岩台地状の島である

## 2. 木本性植物の特徴

### (1) 概要

まとまった森林は、島の台地の東部から北部にかけての平地、台地の南側の斜面および丸山にある。これらの多くは、クロマツが枯れたあとにできた若い森林であったり、2次林である。竹林やスギなどの人工林も多い。島の周囲の崖には、斜面が緩やかなところに常緑樹が主に生えている。台地の畠は、防風用の生け垣が作られており、生け垣の間に生える性植物などが入り込んで



疫神社横にバクチノキが数本ある

いる。また、耕作されなくなった畠には、次第に植物が進入している。海岸部では、海浜性植物が多く見られる。

温暖であるため、バクチノキ、ハマビワなどの暖地性植物が多く自生している。3年間の調

\*萩市立大島中学校教諭・萩市郷土博物館学芸委員

査で、45科109種の木本性植物が確認できた。

## (2) 丸山

島の南東部に位置する標高約60mの小さな山である。40年くらい前まで耕作されていたと思われる段々畑の後が頂上付近まである。半分近くがモウソウチク・マダケ・メダケからなる竹林やスギ林であるが、他は若い自然林である。直徑30cm以上のクロマツが枯れて倒れたあとに森林が形成されつつある。直徑30cm以下のタブノキ、ヤブニッケイ、ヒメユズリハ、ヤマザクラ



たくさんの樹種の幼木が生えている

などが高木層を、クロキ、ヤブツバキ、アラカシなどが亜高木層を占める。

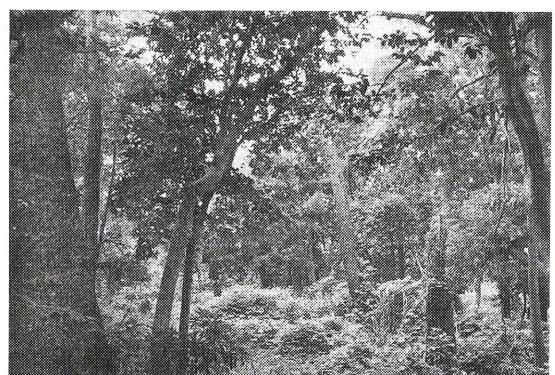
低木層には、トベラ、ハマヒサカキ、ガマズミなど多くの種類の樹木が見られる。

クロマツが倒れてまだ数年しかたっておらず、クロマツが倒れたあとが明るい日溜まりのようになっていて、クロガネモチ、ヤブニッケイ、シロダモ、ヒメユズリハ、トベラ、ヤブツバキ、ヤマハゼ、イヌビワ、アカメガシワ、クロマツなど、陰樹から陽樹まで実に多種の幼木が見られる。あと数十年もすれば、常緑樹を中心とした立派な森林が形成されることが予想できる。

頂上には、幹回りが2m以上もあるモッコクの大木が1本生えている。

## (3) 台地東部から北部

丸山とよく似た林相をしているが、枯れて倒れたクロマツは丸山より細いものが多く、よって、高木層を占める樹木も直徑20cm以下の若い樹木を中心である。また、薪炭林として利用されたあとの2次林になっている場所も多い。名切りから北側の谷になっている場所は、直徑30cm級のスダジイ中心の自然林を作っている。スダジイは、丸山や島の南側では確認されていない



常緑樹中心の森林へ変化しつつある

が、名切りのあたりでは、幹回りが2m級の大木が点在している。台地の東側の農道沿いに暖地性植物であるバクチノキが数本自生しており、同時に幼木もみられる。

崖に近くで風が強い場所では、クロマツが枯れたあとは、カヤやクズなどの草地になっており、その中でクロマツの幼木が1mくらいに育っている。他には、ハゼノキ、クサギ、ネム

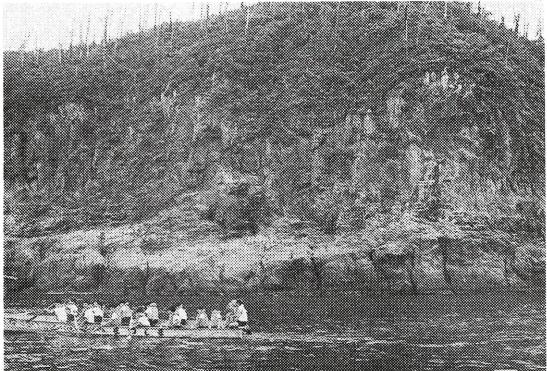
ノキなどが多少見られる程度で、やがては、再び立派なクロマツ林になるのだろうか。名切りの近くでは、直径1m級のクロマツの切り株がたくさん見られる。

松島の近くは、名切りと同じように立派なクロマツ林だったが、今ではほとんど枯れてしまった。松島は、島の美しい自然のシンボルであり、島の人たちの手によって、クロマツやヤシャブシなどの植林と手入れがよくなされてる。

#### (4) 海岸部

雄阿久瀬海岸は約300mの溶岩の礫の海岸で、かつては、クロマツの大木が海からの潮風を防いでいたが、今では全て枯れてしまっている。この海岸は、ハマナタマメ、ハマエンドウ、ハマヒルガオなどの海浜性植物が多く、木本性植物でもトベラ、ハマヒサカキ、テリハノイバラなどが多く見られる。

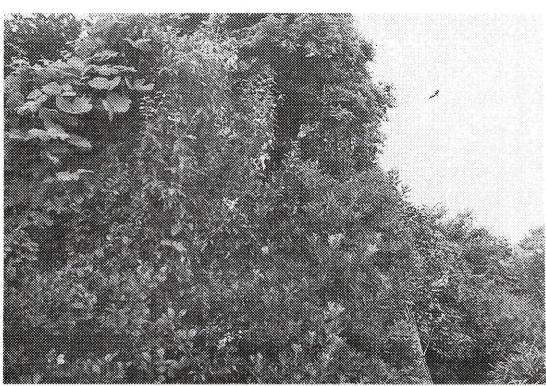
大島の海岸は高い場所では高低差100m以上の海食崖になっているが、わずかでも土があるような場所では樹木が見られる。潮風を受けやすく土が少ない下部では、トベラやハマヒサカキ、マルバシャリンバイが見られる程度であるが、少し上部になると、さらにハマビワ、クロマツ、ハゼノキ、ネムノキ、エノキ、センダン、アキグミなどが入り込む。最上部に近い場所は勾配が緩やかになっている場所が多く、タブノキ、シロダモ、ヒメユズリハなどの常緑樹を中心とした森林を形成している。地面に直径50cm以上あるクロマツの大木が枯れて横たわっている場所もあり、極相林に移行しつつあることがわかる。



崖の上部は、森林ができやすい

#### (5) 台地畠

台地は畠地が広く広がり、夏は主に葉煙草、冬はブロッコリーが作付される。そのためにクロマツ、イヌマキ、イスノキ、サンゴジュ、ヤブツバキが防風垣として仕立てられている。その生け垣に間には、アキニレ、アキグミ、ナワシログミ、イボタノキ、タラノキ、ハマクサギなどの他にアケビ、ティカカズラ、ツルウメモドキ、スイカズラなどのつる性植物などたくさん



防風垣にはさまざまな樹木が入り込む

物が入り込んでいる。所々にヤブツバキ、ハゼノキ、タブノキ、シロダモ、ヤマモモなどの

大木が点在する。特に、台地入り口の農道横には幹回りが2m以上（北浦地区で最大級）あるヤブツバキの大木が数本生えている。

耕作条件が悪い畠は、何年も放置された所が多く、そのような場所には、雑草の中にクズ、クロマツ、クサギ、センダン、ハゼノキなどの陽樹が入っており、次第に森林を形成しつつある。

#### (6) 大島八幡宮叢林

明治時代に大島で大火があり、現在の大島郵便局近くまで火事が広がったといわれているが、大島八幡宮は住宅地よりも高い場所にあるので延焼をまぬがれた。そのため、クロマツ、ムクノキ、タブノキの大木が多く見られる。ただし、狭い叢林で、人の手も多く入っており、いわゆる原生林といわれる状態ではない。

#### (7) 島の人々の信仰と樹木

大島のもっとも古い祖先は、刀禍・豊田・池部・長岡・吉光・貞光・國光であり、平家の落人とも、また、大内の落人とも言われる。小学校グランドの上にある七名塚に祖先を祭った墓があるが、そのうち、別の場所に墓を分けて祭ったものに刀禍様、長岡様、吉光様がある。それぞれ大切に祭られているが、共通して、そばに大木がある。

刀禍様にはヤブツバキの大木が数本あり、長岡様にはタブノキの大木がある。また、吉光様には幹回りが3.6mもあるエノキの大木があり、萩市では最大のエノキである。神聖な場所だけに、これらの樹木は手厚く保護されていたのであろう。県内でもエノキ、クワノハエノキ、ムクノキなどのニレ科の大木を神社や祠の近くで見かけることが多く、ニレ科の樹木は信仰と深い関わりがあるかもしれない。大島八幡宮にもムクノキの大木が数本生えている。



吉光様の大エノキ

## 2. おわりに

島内のほぼ全域にわたって調査をした。しかし、崖など危険なために立ち入れない場所が多く、また、見落としがあることも予想され、実際にはもう少し樹種が多いと思われる。

また、大島は10年近く前までは海岸までたくさんのクロマツの大木が枝を伸ばし、美しい景観を作っていたが、今は見る陰もない。しかしながら、極相林に向かって森林の世代交代は確実に進んでおり、今後数十年間で林相や樹種が大きく変化することが予想できる。将来、植生調査をしたときに、今回の調査結果が、環境の変化を考察する資料になれば幸いである。そのためにもより正確で詳しい調査が待たれる。

### 3. 自生している木本性植物目録

#### マキ科

- 1 *Podocarpus macrophylla* D.Don イヌマキ

#### マツ科

- 2 *Pinus Thunbergii* Parl. クロマツ

#### コショウ科

- 3 *Piper kadzura* Ohwi フウトウカズラ (暖地性植物)

#### ヤナギ科

- 4 *Salix koriyanagi* Kimura コリヤナギ (台地の溜め池周辺に見られる)

#### ヤマモモ科

- 5 *Myrica rubra* Sieb. et Zucc. ヤマモモ

#### カバノキ科

- 6 *Alnus sieboldiana* Matsum. オオバヤシャブシ

#### ブナ科

- 7 *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. クリ

- 8 *Quercus serrata* Thunb. コナラ

- 9 *Quercus acutissima* Carruth. クヌギ

- 10 *Quercus myrsinaefolia* Blume シラカシ

- 11 *Quercus glauca* Thunb. アラカシ

- 12 *Quercus stenophylla* Makino ウラジロガシ

- 13 *Shiia sieboldii* Makino スダジイ

#### ニレ科

- 14 *Ulmus parvifolia* Jacq. アキニレ

- 15 *Aphananthe aspera* Planch. ムクノキ

- 16 *Celtis sinensis* Pers. var. *japonica* Nakai エノキ

- 17 *Celtis boninensis* Koidz クワノハエノキ (リュウキュウエノキ)

#### クワ科

- 18 *Morus tiliaefolia* Makino ノグワ (暖地性植物)

- 19 *Broussonetia kazinoki* Sieb. コウゾ

- 20 *Ficus erecta* Thunb. イヌビワ

- 21 *Ficus erecta* var. *sieboldi* King ホソバイヌビワ

モクレン科

- 22 *Illicium religiosum* Sieb. et Zucc. シキミ  
23 *Kadsura japonica* Dunal サネカズラ

アケビ科

- 24 *Akebia quinata* Decne. アケビ  
25 *Akebia trifoliata* Koidz. ミツバアケビ  
26 *Stauntonia hexaphylla* Decne. ムベ

メギ科

- 27 *Berberis thunbergii* DC. メギ

ツヅラフジ科

- 28 *Stephania japonica* Miers ハスノハカズラ

クスノキ科

- 29 *Cinnamomum camphora* Sieb. クスノキ (名切りの北方に自生)  
30 *Cinnamomum japonicum* Sieb. ヤブニッケイ  
31 *Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc. タブノキ  
32 *Machilus japonica* Sieb. et Zucc. ホソバタブ  
33 *Litsea glauca* Sieb. シロダモ  
34 *Litsea japonica* Juss. ハマビワ (暖地性植物)

ユキノシタ科

- 35 *Deutzia crenata* Sieb. et Zucc. ウツギ

トベラ科

- 36 *Pittosporum tobira* Ait. トベラ

マンサク科

- 37 *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. イスノキ (暖地性植物、大島八幡宮叢林に自生)

バラ科

- 38 *Pourthiaeae villosa* Decne. カマツカ (ウシコロシ)  
39 *Amelanchier asiatica* Endl. ザイフリボク  
40 *Rhaphiolepis umbellata* Makino var. *integerrima* Reher  
マルバシャリンバイ (大岩周辺の崖で確認)  
41 *Rubus trifidus* Thunb. カジイチゴ (台地南部で1株だけ確認)  
42 *Rubus hirsutus* Thunb. クサイチゴ  
43 *Rubus palmatus* Thunb. ナガバモミジイチゴ  
44 *Rubus parvifolius* L. ナワシロイチゴ  
45 *Rubus buergeri* Miq. フユイチゴ

- 46 *Rubus sieboldi* Blume ホウロクイチゴ (暖地性植物)  
 47 *Rosa multiflora* Thunb. ノイバラ  
 48 *Rosa wichuraiana* Crep. テリハノイバラ  
 49 *Prunus donarium* Sieb. var. *spontanea* Makino ヤマザクラ  
 50 *Prunus zippeliana* Miq. バクチノキ (暖地性植物、疫神社や台地の東部・北西部の3  
 カ所で自生を確認)

マメ科

- 51 *Albizia julibrissin* Durazz. ネムノキ  
 52 *Wistaria brachybotrys* Sieb. et Zucc. ヤマフジ  
 53 *Lespedeza crytobotrya* Miq. マルバハギ  
 54 *Pueraria thunbergiana* Benth. クズ

ミカン科

- 55 *Xanthoxyum piperitum* DC. サンショウ  
 56 *Fagara mantchurica* Honda イヌザンショウ  
 57 *Fagara ailanthoides* Engl. カラスノサンショウ

センダン科

- 58 *Melia azedarach* L. var. *japonica* Makino センダン (暖地性植物)

トウダイグサ科

- 59 *Daphniphyllum teijsmanni* Zollinger ヒメユズリハ  
 60 *Mallotus japonicus* Muell. Arg. アカメガシワ

ウルシ科

- 61 *Rhus succedanea* L. ハゼノキ  
 62 *Rhus javanica* L. ヌルデ

モチノキ科

- 63 *Ilex rotunda* Thunb. クロガネモチ (暖地性植物、丸山に自生)

ニシキギ科

- 64 *Euonymus sieboldiana* Blume マユミ  
 65 *Euonymus japonica* Thunb. マサキ  
 66 *Celastrus orbiculatus* Thunb. ツルウメモドキ

ミツバウツギ科

- 67 *Euscaphis japonica* Kantz ゴンズイ

ムクロジ科

- 68 *Sapindus mukurossi* Gaertn. ムクロジ (暖地性植物)

ブドウ科

- 69 *Vitis thunbergii* Sieb. et Zucc. エビヅル  
70 *Parthenocissus tricuspidata* Planch. ツタ  
71 *Ampelopsis brevipedunculata* Trautv. ノブドウ

サルナシ科

- 72 *Actinidia rufa* (Sieb. et Zucc.) Planch. シマサルナシ (暖地性植物)

ツバキ科

- 73 *Camellia japonica* L. ヤブツバキ  
74 *Ternstroemia japonica* Thunb. モッコク (暖地性植物、丸山頂上に大木が自生)  
75 *Cleyera ochnacea* DC. サカキ  
76 *Eurya japonica* Thunb. ヒサカキ  
77 *Eurya emarginata* Makino ハマヒサカキ (暖地性植物)

イイギリ科

- 78 *Xylosma japonicum* A. Gray クスドイケ (暖地性植物)

グミ科

- 79 *Elaeagnus umbellata* Thunb. アキグミ  
80 *Elaeagnus pungens* Thunb. ナワシログミ  
81 *Elaeagnus glabra* Thunb. ツルグミ  
82 *Elaeagnus macrophylla* Thunb. マルバグミ (暖地性植物)

ウコギ科

- 83 *Fatsia japonica* Decne. et Planch. ヤツデ  
84 *Hedera rhombea* Bean キヅタ  
85 *Aralia elata* Seem. タラノキ

ミズキ科

- 86 *Cornus brachypoda* C. A. Mey. クマノミズキ  
87 *Aucuba japonica* Thunb. アオキ

ツツジ科

- 88 *Rhododendron reticulatum* D. Don コバノミツバツツジ (台地東部に自生)

ヤブコウジ科

- 89 *Ardisia japonica* Bl. ヤブコウジ

ハイノキ科

- 90 *Symplocos lucida* Sieb. et Zucc. クロキ (暖地性植物)

モクセイ科

- 91 *Ligustrum obtusifolium* Sieb. et Zucc. イボタノキ  
92 *Ligustrum japonicum* Thunb. ネズミモチ

キヨウチクトウ科

- 93 *Anodendron affine* Druce サカキカズラ (暖地性植物)  
94 *Trachelospermum asiaticum* Nakai テイカカズラ

ムラサキ科

- 95 *Ehretia ovalifolia* Hasskarl チシャノキ (暖地性植物、野尻海岸の崖に自生)

クマツヅラ科

- 96 *Callicarpa mollis* Sieb. et Zucc. ヤブムラサキ  
97 *Clerodendron trichotomum* Thunb. クサギ  
98 *Premna japonica* Miq. ハマクサギ

ナス科

- 99 *Lycium chinense* Mill. クコ

スイカズラ科

- 100 *Sambucus sieboldiana* Blume ニワトコ  
101 *Viburnum dilatatum* Thunb. ガマズミ  
102 *Lonicera morrowii* A. Gray キンギンボク (ヒョウタンボク) (寒地性植物)  
103 *Lonicera japonica* Thunb. スイカズラ

イネ科

- 104 *Phyllostachys bambusoides* Sieb. et Zucc. マダケ  
105 *Phyllostachys pubescens* Mazel モウソウチク  
106 *Phyllostachys nigra* Munro クロチク (台地北西部に自生)  
107 *Pleioblastus simonii* Nakai メダケ  
108 *Pleioblastus variegatus* Makino var. *viridis* Makino forma *glabra* Makino  
ネザサ

ユリ科

- 109 *Smilax china* L. サルトリイバラ

# 櫃島・尾島（萩市沖合）の非海産貝類

\*増野和幸

## 1. はじめに

萩市沖合には、見島をはじめ相島・大島・尾島・櫃島・肥島・羽島の六島が点在する。過去におけるこれら島嶼部の非海産貝類調査は、萩市郷土博物館、山口貝類研究談話会を中心に進められ、見島・相島・大島・羽島の四島については河上ら（1990）の報告が、また羽島・肥島については筆者（1996）が概略を報告している。筆者は、1994年8月5・6日尾島に、同年8月31日櫃島に渡る機会があり、短時間ではあったが調査を試みたのでその結果を報告する。尾島には学校行事（臨海学校）で、櫃島には萩市郷土博物館の動植物総合調査のために渡島した。尚、両島とも狭い島である上、植相も貧弱であり、川、渓流は見られず、わずかに櫃島に堤が存在ただけで、淡水産貝類ではサカマキガイが確認されただけであった。

尾島、櫃島ともに過去における調査記録はなく、今回の報告がはじめてとなる。櫃島では、サカマキガイ、ヘソカドガイ、サンインマイマイ、コベソマイマイ、ツクシマイマイ、オボロナミギセル、チクヤケマイマイ、オナジマイマイ、キュウシュウシロマイマイ、シイボルトコギセルの淡水産1種、陸産9種を確認した。尾島では、ヘソカドガイ、ヤマトクビキレガイ、サツマクリイロカワザンショウガイ、ホソオカチョウジガイ、オカチョウジガイ、シイボルトコギセル、ナガトギセル、ウスカワマイマイ、チクヤケマイマイ、ナミギセル、コベソマイマイ、サンインマイマイ、リシケオトメマイマイ、ベッコウ種2種の陸産14種であった。

今回の調査にあたって、萩市郷土博物館には調査の機会を与えていただき感謝の意を表す。

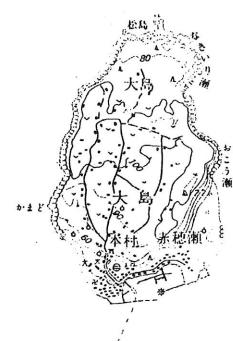
## 2. 島の概要

以下の記述は、  
山口県百科事典  
(1982) を参考に、  
筆者の確認した状況を加えたもので

ある。（図1）



図1 萩市沖合の日本海に浮かぶ尾島・櫃島の位置（国土地理院5万分の1地形図複製：萩市役所の一部）



\*萩市立萩東中学校教諭・萩市郷土博物館学芸委員

**櫃島** 萩市浜崎港の北方約9kmの海上にある玄武岩台地の島で、周囲は40~60mの海食崖となり、最高点は90.1m。面積0.7km<sup>2</sup>（図2）。周囲はクロマツの防風・防潮林に囲まれ、一部にアカマツ、竹及び広葉樹等が見られる。台上は葉タバコなどの畑作が行われている。東南部に位置する神社叢は、まとまった樹林となりリュウキュウエノキなどの大木が繁茂する。島の南部に面したわずかな海岸に港がある。貝類の採集は、港から集落に至る沿道の藪や人家・畑周辺、神社叢を中心に実施した。

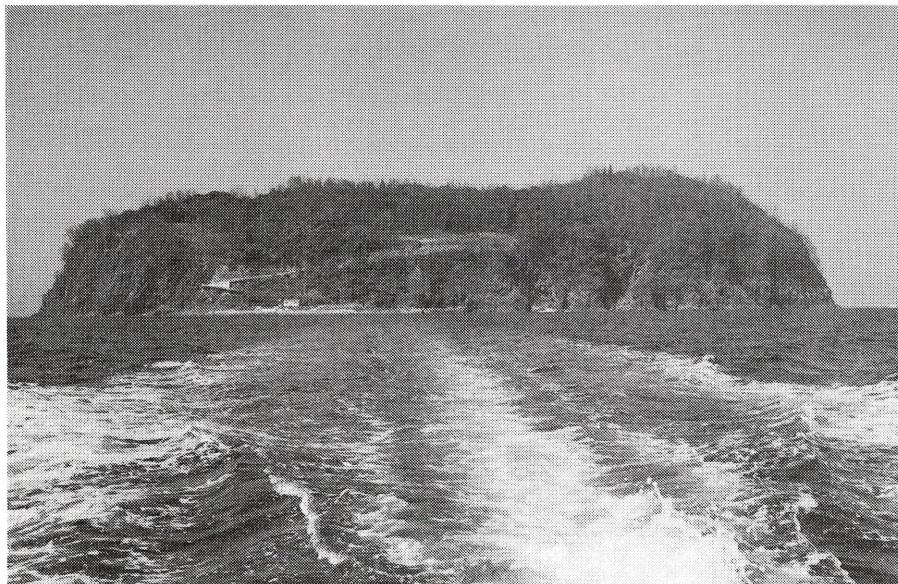


図2 櫃島全景（本土側）

**尾島** 萩市浜崎港の北西約10.5kmの海上にある玄武岩台地の小島。面積0.4km<sup>2</sup>。1973年まで葉タバコ中心の農耕の島であったが、本土に移住し無人島である。島に渡った季節が夏で、蔓性の植物がススキ等にからみつき、台上奥部まで立ち入ることを許さなかった。採集は、海岸部に残る廃屋周辺や崖付近のわずかなガレ場で実施した。

### 3. 注目すべき種

採集した貝類は下記の目録にあげた19種であるが、いくつかの種についてコメントを加える。尚、尾島については二日間の滞在であったが、調査時間は行事の空き時間であったこと、また、島の南部の海岸域に限定されたもので、全域を網羅するものではない。両島とも今後の調査により、微小種も含めて多くの追加種が期待される。

#### ○シイボルトコギセル

県内では、厚狭・下関・豊浦を中心に、東部は柳井市平郡島、北部は須佐町高山岬（筆者未発表）、内陸部は美祢市・美祢郡に生息域をもつ。萩市の離島では、見島・相島・大島・羽島・

肥島と今回報告する櫃島・尾島にも生息し、萩市沖合の見島も含め六島全部に分布することが分かった。各島では、神社叢に限らず樹相のやや発達した林では、生育する樹木の幹で容易に見ることができる。櫃島では、船着き場から集落に至る沿道の林、神社叢の樹幹に4個体、尾島では海岸部の樹幹に1個体確認した。

#### ○ナガトギセル

本種は近隣の大島・相島・羽島・肥島にも密度濃く生息する（増野,1988.1989.1996）。尾島では、廃屋周囲の藪の中に25個体を確認した。櫃島からは見いだすことができなかった。県内各地に生息する本種は、県東部に本種に酷似した *Clausilia (Hemiphaedusa) harimensis* Pilsbry ハリマギセルと呼ばれる種が分布する。湊（1988）によると両者の外観的な差異は認められなく、原種である *Paganizaptyx stimpsoni subgibbera* (Boettger,1877) スグヒダギセルのシノニムとされている。ここでは、従来の細分法に従った。

#### ○ナミギセル

本種の全国的な分布は、本州・四国・九州（中・北部）とされ広域に分布し、変異型が出現する（湊,1988）。山口県内でも、キセルガイとしてはごく普通に各地に生息し、とりわけ特殊というわけではない。尾島においては、廃屋周囲の藪の中で10個体採取した。標準的な個体よりやや小形であった。櫃島においては、神社叢とこれに続く墓地付近の落葉下、船着き場より集落に至る沿道の藪から11個体を採取した。この櫃島の個体は、殻の縫合付近に薄く白色の帶模様があり、*Clausilia (Stereophaedusa) japonica* Pilsbry オボロナミギセル型である。筆者は、隣接する相島より本個体と同じものを記録している（増野,1989）。

#### ○オナジマイマイ

本種はチモール諸島からの移入種で、全国的な分布は本州・四国・九州。山口県においても、人家周辺や耕作地など人手の入った各地から普通に記録されている。萩市内でも市街地の江向（増野ほか,1990）、笠山の夏柑畑（増野未発表）、霧口（樋口尚樹未発表）から記録している。今回記録した櫃島のものは、人家の畑付近で殻にバンドを有した1個体と無帯の1個体であった。なお、前述江向・笠山・霧口の個体にも有帯型が混生していた。

#### ○キュウシュウシロマイマイ

本種の全国的な分布は、本州の山口県および九州（湊,1988）とされ、北九州から山口県西部においては周縁下部が薄く褐色に染め分ける *Trishoplita cretacea bipartita* Pilsbry ソメワケシロマイマイとされる型が生息する。また、黒田が報告している螺塔の高い型（黒田,1957）が愛媛県北部から広島県・島根県西部、山口県中東部に分布する。この螺塔の高い型は周縁下部に濃褐色の色帯のある個体と周縁下部が全面濃褐色に染められる2つのタイプが現れる。これらは、キュウシュウシロマイマイよりも鳥取県日南町印賀を模式産地とする *T.eumenes cretacea* Gude,1900 コウダカシロマイマイのクロオビ型である *T.c.hypozonea* Pilsbry & Hirase ク

ロオビシロマイマイに酷似する。しかし、クロオビシロマイマイが螺塔が低平であるのに対し、キュウシュウシロマイマイの螺塔の高いタイプは螺塔の傾斜が大きくなる点で、別種である可能性が高い。今回報告する櫃島の個体も、キュウシュウシロマイマイの螺塔高きタイプである。船着き場から集落に至る沿道の樹幹で3個体を採集した。萩市沖の島嶼部では、隣接する大島で記録されている（増野,1988）。

#### ○リシケオトメマイマイ

本亜種は模式産地萩を記載され、山口県日本海側の固有亜種で樹上生活をする。生貝では、殻から透けて軟体部に黒色の斑紋があり、殻の周縁に赤褐色の色帯をもつことを特徴とする。これまでのところ向津具半島・長門市・三隅町・萩市・阿武町にかけて生息していることが確認されている。萩市の離島では、見島（黒住,1975）・相島（相島,1989）・羽島（増野,1996）に生息している。今回報告する尾島では、海岸部のススキの藪より死骸であるが12個体を採取した。なお、豊北町角島周辺に産する形態的に類似した個体群は、福田・土田（1989）により外套膜上の斑紋、殻の大きさ、色帯の差異により別亜種とされている。

#### ○ベッコウマイマイ 2種

殻が小さく、同定を確実に行うことができなかった。1種は、周縁が丸く螺塔が低い、周縁下部が全面白色を呈する点から *Urazirochlamys* sp. ウラジロベッコウ属と考えられる。さらなる1種は、殻色がやや赤褐色で周縁丸く、螺塔がやや高くなる点で *Yamatochlamys* sp. ナミヒメベッコウ属と考えられる。今後、生貝を採集するなど検討を要する。

#### 4. 採集目録

- |    |  |             |
|----|--|-------------|
| 1  | <i>Truncatella pfeifferi</i> Martens, 1960 ヤマトクビキレガイ             | 尾島；多数       |
| 2  | <i>Angustassiminea satumana</i> (Habe, 1942) サツマクリイロカワザンショウガイ    | 尾島；多数       |
| 3  | <i>Paludinellassiminea japonica</i> (Pilsbry, 1901) ヘソカドガイ       | 櫃島・尾島；多数    |
| 4  | <i>Physa (Physella) acuta</i> Draparnaud, 1805 サカマキガイ            | 櫃島；2exs.    |
| 5  | <i>Clausilia subaurantiaca</i> Pilsbry, 1900 ナガトギセル              | 尾島；25exs.   |
| 6  | <i>Stereophaedusa (S.) japonica japonica</i> (Crosse, 1871)      | 櫃島；11exs.   |
| 7  | <i>Phaedusa sieboldtii</i> (Küster, 1847) シイボルトコギセル              | 櫃島・尾島；5exs. |
| 8  | <i>Allopeas javanicum</i> (Reeve, 1849) ホソオカチョウジガイ               | 尾島；7exs.    |
| 9  | <i>A. clavulinum kyotoense</i> (Pilsbry & Hirase, 1904) オカチョウジガイ | 尾島；9exs.    |
| 10 | <i>Yamatochlamys</i> sp. ナミヒメベッコウ属の一種                            | 尾島；1ex.     |
| 11 | <i>Urazirochlamys</i> sp. ウラジロベッコウ属の一種                           | 尾島；1ex.     |
| 12 | <i>Satsuma (S.) myomphala myomphala</i> (Martens, 1865) コベソマイマイ  |             |

櫃島・尾島；6exs.

13 *Aegista (Plectotropis) aemula aemula* (Gude,1900) チクヤケマイマイ

櫃島・尾島；多数

14 *Trishoplita eumenes eumenes* (Westerlund,1883) キュウシュウシロマイマイ

櫃島；3exs.

15 *T.collinsoni lischkeana* (Kobelt,1879) リシケオトメマイマイ 尾島；12exs.

16 *Euhadra herklotsi herklotsi* (Martens,1860) ツクシマイマイ 櫃島；多数

17 *E.dixoni dixoni* (Pilsbry,1900) サンインマイマイ 櫃島・尾島；7exs,

18 *Bradybaena similaris* (Férussac,1831) オナジマイマイ 櫃島；2exs.

19 *Acusta despecta sieboldiana* (Pfeiffer,1850) ウスカワマイマイ 尾島；3exs.

#### 引用・参考文献

Fukuda,H (1994) Estuarine Mollusks of the Edogawa Drain,central Honshu,Japan. Science Report of the Takao Museum of Natural History,(16) : 1 – 14.

福田 宏・増野 和幸・杉村 智幸 (1992) 概説山口県の貝類.viii + 100 + xxvipp.,50pls. 山口県立山口博物館.

Fukuda,H.& Mitoki,T.(1995) A Revision of the Family Assimineidae (Mollusca : Gastropoda : Neotaenioglossa) Stored in the Yamaguchi Museum.Part1 : Subfamily Omphalotropidinae. Bulletin of the Yamaguchi Museum,(21) : 1 – 20.

福田 宏・土田 英治 (1989) リシケオトメマイマイの再発見とその分布.ちりぼたん,19 (49) : 97 – 104.

河上 熟・増野 和幸・下瀬 信雄・吉屋 安隆・樋口 尚樹・清水 満幸 (1990) カタツムリの不思議－萩地方の陸産貝－.2 + 85pp.,2pls.,1map.萩市郷土博物館.

河本 卓介・田辺 澄生 (1956) 山口県産貝類目録.8 + viii + 170pp.,(incl.25pls). 山口県立山口博物館.

黒住 耐二 (1975) 山口県見島で得た貝類 (そのいち).いそこじき,(21) : 17 – 20.

黒田 徳米 (1957) 日本及び隣接地域産陸棲貝類相 (4).Venus (Jap.Jour.Malac.) 20 (1), 273 – 293.

増野 和幸 (1988) 萩市大島の陸産貝類.山口生物,15 : 5 – 8.

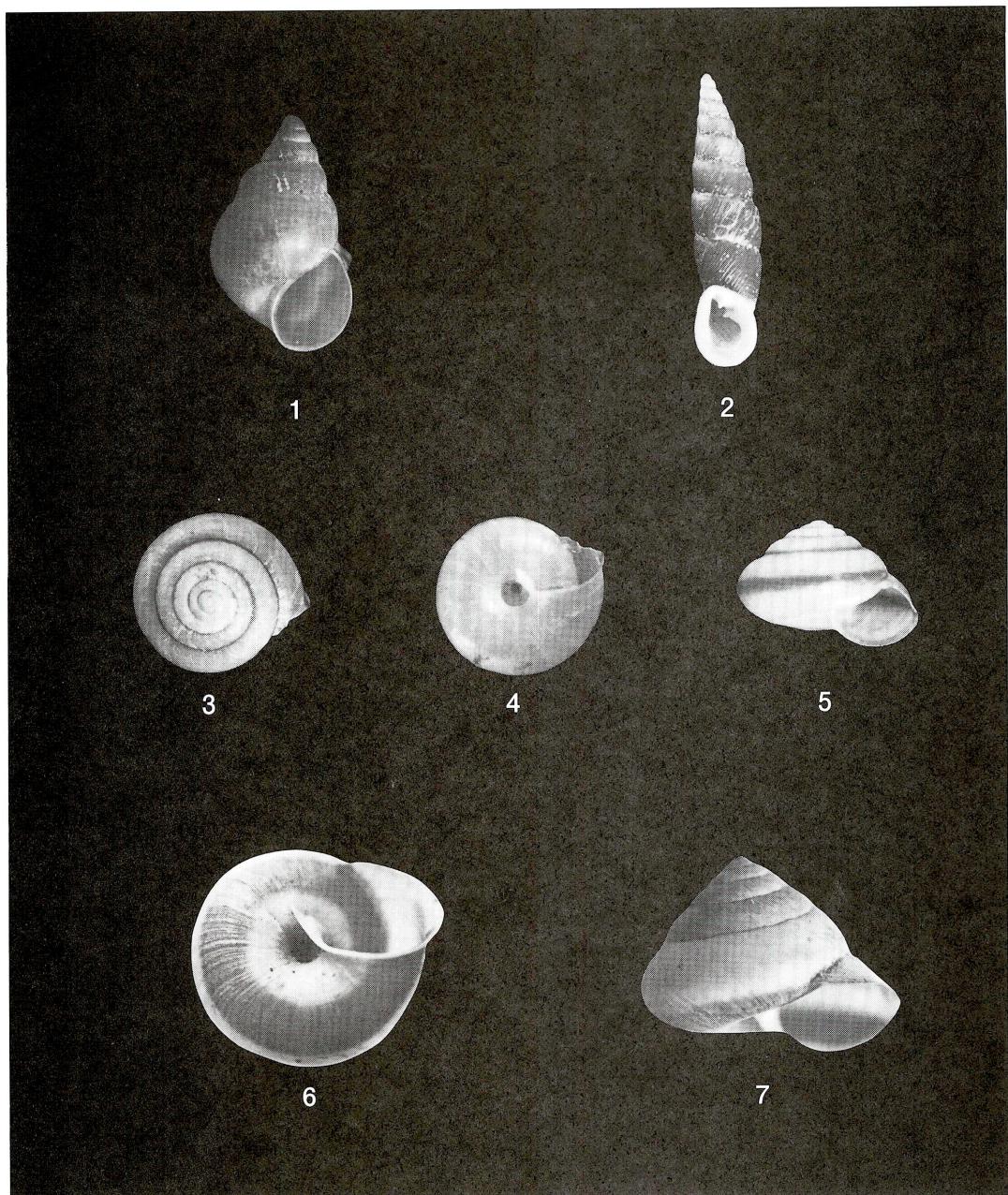
増野 和幸 (1989) 萩市相島の陸産・淡水産貝類.山口県の自然,(49) : 26 – 28.

増野 和幸 (1996) 羽島・肥島 (萩市沖合) の非海産貝類.山口県の自然,(56) : 35 – 41.

湊 宏 (1988) 日本陸産貝類総目録.294pp.日本陸産貝類総目録刊行会,白浜.

山口県教育会 (1982) 山口県百科事典.1001pp.山口.

図 版

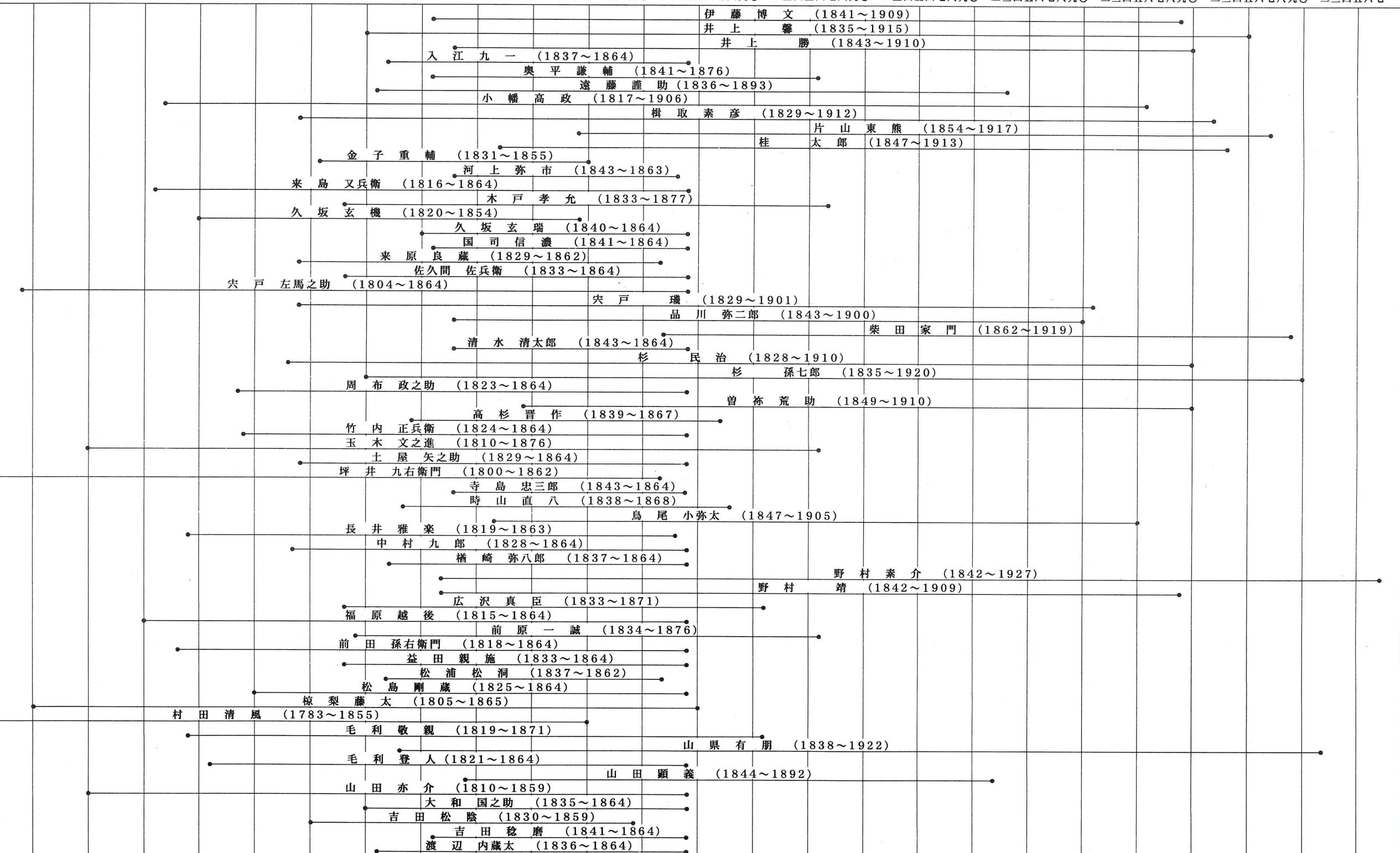


図版説明

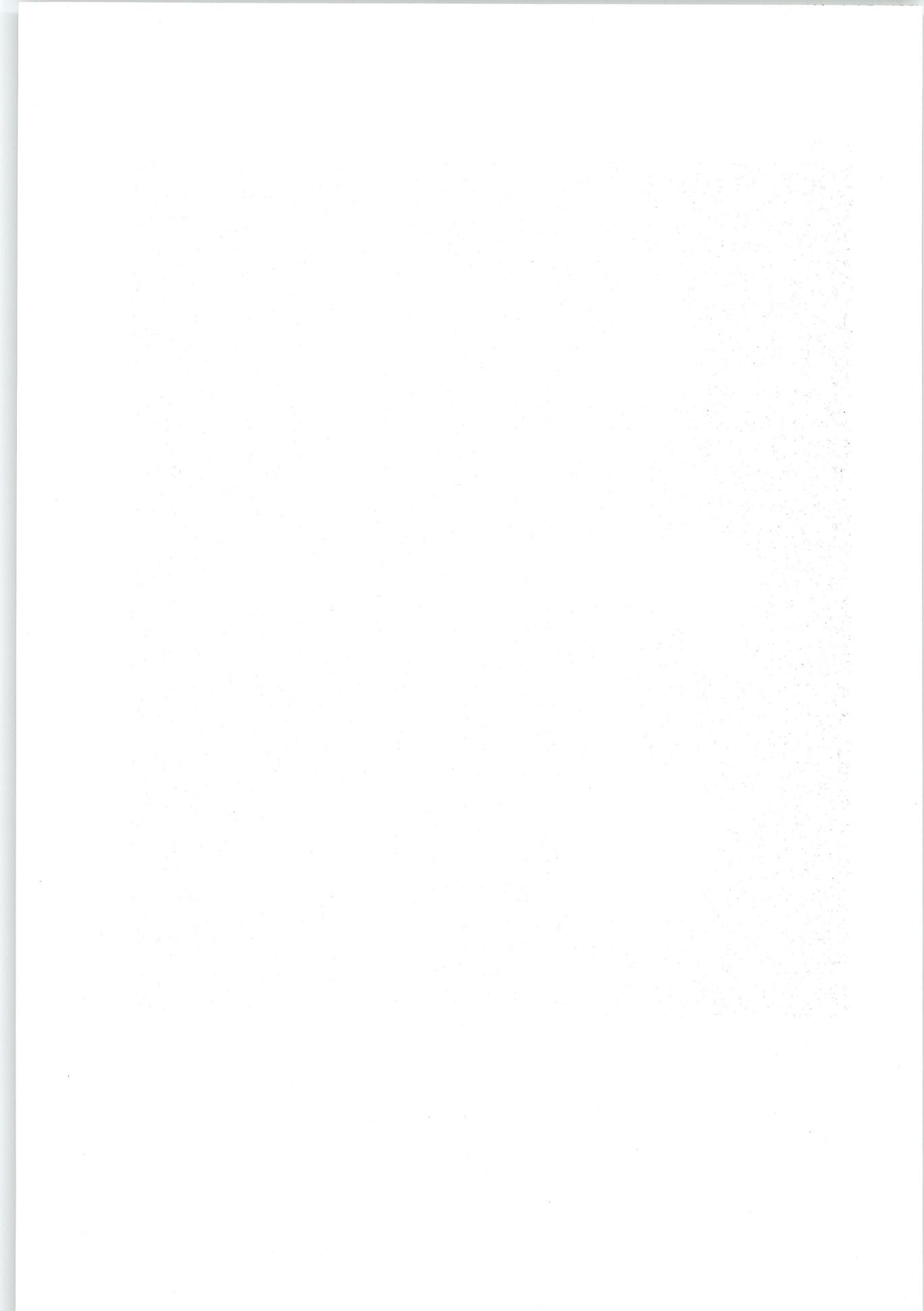
- 1 *Paludinellassiminea japonica* (Pilsbry, 1901) ヘソカドガイ
- 2 *Phaedusa sieboldtii* (Küster, 1847) シイボルトコギセル
- 3 - 5 *T. collinsoni lischkeana* (Kobelt, 1879) リシケオトメマイマイ
- 6 - 7 *Trishoplita eumenes eumenes* (Westerlund, 1883) キュウシュウシロマイマイ

# 萩關係明治維新人物生沒年一覽

天明～寛政和文化 文政 天保 弘化 嘉永 安政 万文 元慶 明治 大正 昭和







---

1999年2月25日 印刷  
1999年3月1日 発行

萩市郷土博物館研究報告  
第 9 号

発行 萩市郷土博物館  
萩市江向 525-4

印刷 (有)マシヤマ印刷  
萩市大字椿 3732-7

---

